明治三十二年四月二十五日發兌

女鑑

第百七拾九號

東京國光社

女鑑第百七拾九號

目録

讃岐



學と藝と

學問は、人の人たる道を尋ね、人の身に行ふべき事を問ひまねぶを云ふにて、即、人は禽獸と何處が異なる、人は如何にして出で來りたる、造物者あり、親ありて出で來りたり。而して、人は如何なる事をなし、此の造物者、父母に如何に答へんと思ひ、善とは如何に、惡とは如何に、忠は如何に、不忠は如何に、義は如何に、不義は如何に、かくては信なるか、はた信ならぬかなど、人の思ひ行ふべき事を悟らんとするを學問と云ふ。藝は、たゞ其の身、其の手足にとるべき事にして、之はまた多端なり。まづ女子のとるべき裁縫も、うみつむぎも、機織ることも藝なり。弓を射るを射藝と云ひ、すべて藝はその身に行ふ業なり。學問は心を磨くものなり。然るに、今の世は、學問と藝とを同一に心得るものいと多く、學問を以て藝とし、藝

を學問とす。茲に音樂師あり、誠に美くしき聲に、うつくしき音によく歌ふ。歌へども、たゞ聲うつくしく、音のいみじきのみならば、即、藝なり。心もまたいみじく美くしく、先王の德を考へ行ふ。これ學問となる。書を讀み、理を講ず、よき人のよき敎にのつとり、人の人たる道を問ひ、己に行ふ、是いみじき學問なり。されど、其の心をみがき、その身を修めんことは思はず、いたづらに書をよむ、是たゞ書を讀む藝なり。其の文を講ず、それまた講釋の藝にて、講談師、落語家に異ならざるのみ。此のでろの學者、往々、學と藝とをあやまる者多く、孝行、義理、書には多くよみ、文には多く講ずれど、其の身には中々に行はず。また、或は高等の敎育家にたち、人を敎ふるに身分の高等、位階の貴きをえらび、學を講じ、書をよみ聞えて、位いやしく、家貧しきものは、雨ふり風吹く日に問ふも、顧みぬと云ふやうのものもあるよし。これこそは、學問を、藝とも商ともあやまるいやしきものにて、誠の學者の耻る所なれ。あはれ、學に志す孃たち、學と藝とを同一になし給はぬやう、ひたぶるに思ひ考へ給ひてよ。



論説

覺悟如何

石榑青苔寄

世は西國のよこしま風にあらされて、やまと島根はいつもあだ波にあらはれ、漸く美風良俗をあらひ去られむとす　世にたちて、かひ〱しくもひとりその風波の　にあたりしは、わが愛する女鑑にあらずや。

女鑑生れてより、はやく二百に近き號をかさね、幾年月を經ぬれど、其間一貫して、その主義を更めず、よく婦女子の薰陶につとめたるは、感激に堪へざる所なり。もし女鑑にして、この間に生立たざらしめむ、世は益歐化せられて、わが土地にもわが體格にもふさはしき衣は筒袖となり、華帽を冠り靴を穿ちて、手にはホークとナイフとを取り、煉化室内、椅子がゝりに變りしなるべし。

さむれこれ表面のことなれど、何にまれ世のうつりゆくまゝにうつりゆかしむるも何かあらむ、といふものあらん、されど衣食住にして、斯の如くあらたまりたらむには、又

裏面に著しき變動あるを忘るべからず。この折に於ては、父母の靈前に禮拜する人もあらざるなり、君主の闕下に敬服する人もあらざるなり、神佛の殿堂は邪敎の禮拜堂となり、祝詞、經文にかふるに、バイブルと讃美歌集ならずんば、狐狸の巣窟と化したらむ秋なるを奈何せん。

さはれこれにても猶表面の事とのみいふを得るか、父、父たらずとも、子は子たる道をつくし、君、君たらずとも、臣は臣たる行をあやまらず、敬神報本、神代より傳はりし、固有の美風良俗地を拂ひて去りたらむ時、生れし折の初名は本の如しとするも、人はもとの人にあらざる也。事によれば、名まで呼惡しといひ、異敎國、異文字國のなりと自られとして、蛇蕃とか、朱鑾とかいひたらむも知るべからず。あゝこゝに於て、わが日本はなきなり。上に萬世一系の皇帝を戴き、下に神代以來の臣民を有し、倫常正しく、千萬年の昔より、敢て失墜なかりしわが日本はあらざるなり。

あゝ滔々たるあら風おだ波をふせぎて、この不幸を濁流の中にすくひし女鑑の功、大なるは、われ今更こゝにいふまでもあらざらむ。

されどその風波のあまり急激なりしために、むしろ反省を促がし、これが防禦に注意し、又世人もこれに捲去らるゝの不幸を見ずして了りしならんもしるべからず。もしこの風

波にして、徐々に攻寄せ來らむか、吾人が不知不識の間に、浸入し得られしやも圖るべからず。殊に女性のうつり易き感情に對しては、なほ一層の危險を感ぜざるべからず。而して如何、かの一時急激に攻寄せし風波は、今全く跡ををさめしや、あらずや。諸種の形に變じて、不知不識の間に、いつしか浸入せんと試みつゝあるが如きことなきや、あらずや。

われは女鑑が蓋世の功をおもひ、はた又猶この杞憂の中に彷徨せるものなり。條約の改正は行はれ、內地雜居の期、前にあり。よし今全く跡ををさめ、浸入せむと試みつゝあるが如きもののなしとするも、又將來來るべき風波の防禦を忘るべからず。この間にありて、女鑑の覺悟果していかに。婦女の覺悟果していかに。あらず〳〵、わが邦家を思ふ士人の覺悟果していかに。

智識の判斷を主とす可し

鹿山

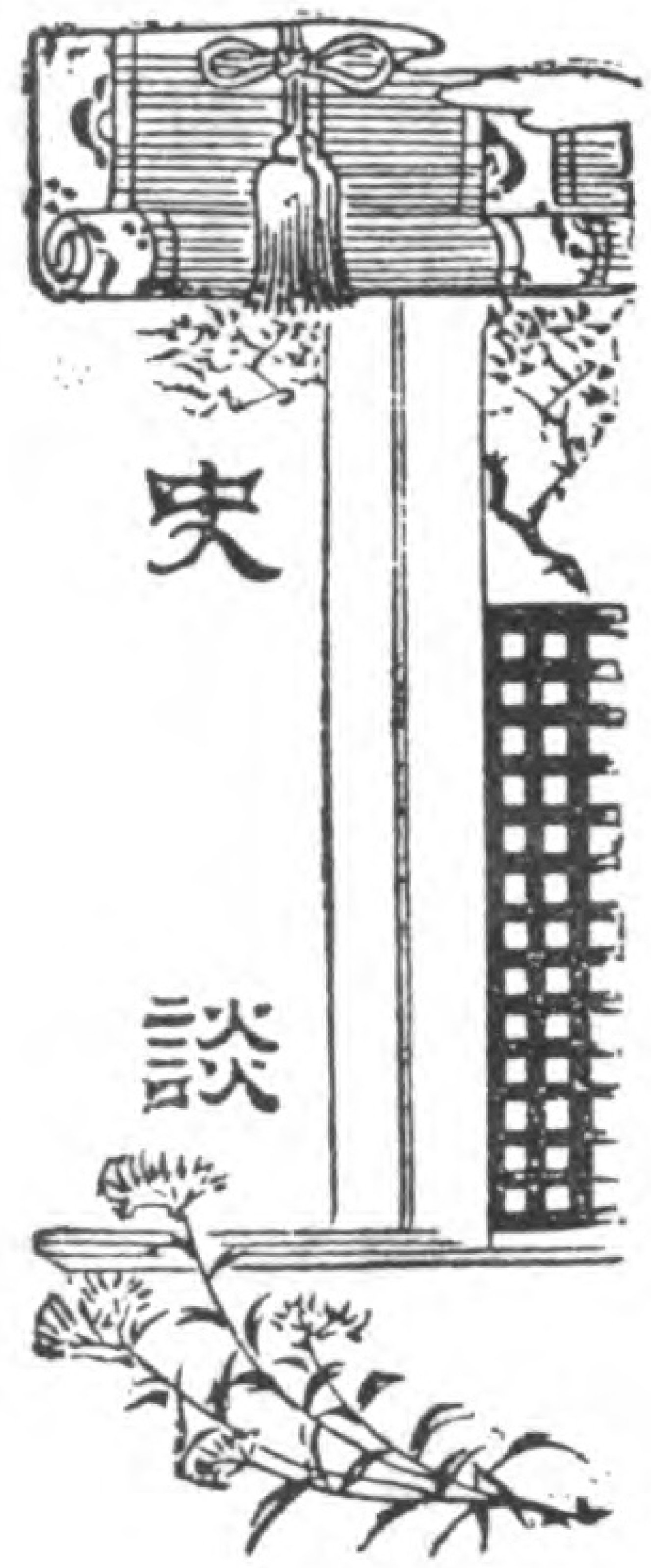
之を小にして一身、之を大にして國家、凡そ事物の利害、曲直、去就、安危、先後を決するは、感情の力に非ず、智識の辨に存す、智識明かならされど、感情に激するは無益なり、感情は往々人心を亂る、是れ男子亦免れず、然れども女子は殊に甚し、彼等は感

情を先にして智識を後にし、事物の性質を辨別するの能力を養はざる者の如し、是れ其社會に活動せざる主因に非ざるか、知力發達せざる者は生存競爭の世に立つ可からず、家庭を整理し社會を改良する豈容易ならんや、女子の多感にして淺識なるは其天稟に發し、今一朝にして如何とも爲す可らずと雖も、苟も家庭を整理し社會を改良するの任務を有する以上は、之に放任して默坐すべからず、故に吾人は切に智識の判斷力を養はんことを望む、永久の勝利は智力に歸すればなり、獨り憾む、滔々たる天下の識者にして未だ慮の此に及ぶ者あらざるは何ぞ。

日本人は凡て感情に富む、然れども明確なる智力を以て之を利導せざれば、時に或は激越して本質を沒せんとす、且つ事物の理否得失を精考するは智力なるを以て、文明日新の今日に於て最も其必要なるを認む、例へば子女を教育するも、風俗を改良するも、他人と交際するも、家政を掌理するも、必要の智識を有せざれば決して獨立の資格を保つ能はず、其負荷せる任務盡く畫餅に屬せん、蓋し智識を以て感情を制するは、是れ文明人の天性なり、感情の爲めに智識を枉ぐるは、竟に未開人たるを免れず、悲歎憤怒の如き感情は、智識の大なるに隨て收縮する者、決して智識の上に立たしむ可からず、吾人は玆に心理的研究を求めず、唯感情に驅られて智識を滅する愚者を救はんと欲するのみ、約

言すれた、文明の源は智力に發する事を吾人は玆に斷言す。
今や社會の事物日に複雜を加ふ、此間に立て家を理め國を護る、豈容易の業ならんや、精思達觀、以て內外の事情を解し、奮て百年の計を樹つるに非ざれば、噬臍も無効のみ、世人は須らく智識を以て感情を役すべし、決して感情の隷と爲る勿れ、然り而して我が巾幗社會の現況を看るに、小說を喜び、演劇を喜び、音樂を好み、詩歌を好むの弊あるも、飜て智力界の事業を求むれば、萎靡不振、寥々として曉星の如し、是れ最も惜むべしと爲す、今試に感情の弊を再言せんか、彼の子弟敎育の如き其主要なるもの、父母の敎育する所、若し喜怒哀樂の情に偏して學藝を忽にせば、其結果終に如何なるべきか、而して其喜怒哀樂なる者亦不意に之を發せば、其結果果して如何なるべきか、是れ智者を俟たずして知るべし、之を要するに、吾人は日本人中熱誠の士頗る多きを信じ。仁義の國に背かざるを懌ぶと雖、若し智識學術の點に至ては未だ容易に首肯する能はず、知らず、日本人は果して智力競爭の世に特立して屈せざるを得るや否や、智德駢進して文明始めて期すべきなり。





讃岐

鹽井福子

道を守り、身を修むる讃岐の如きを、學ある人と云はまし。讃岐は二條院につかへまつりし女房にて、源三位頼政がうまごにて伊豆守仲綱が女なり。人となり賢良にて、かくれなき歌よみなり。かつて、石に寄する戀と云ふ題にて、

わが戀は汐干に見えぬ沖の石の
人こそしらね乾くまもなし

とよみけるに、その歌のいみじかりし故に、沖の石の女房と字されたりとぞ。此の女房、孝行の志あつく、つねに云ひけるやう、今の世の人、生れ日をよろこびいはひまつるは大なる僻事なり。おのれは此の日に、父母の千辛萬苦を思ひて、食事をも忘れ、思ひ苦るしむに堪へたりとて、涙を滴しぬるとかや。この事、程子がときおかれたる朱子小學の書に入れられたる言なれど、その頃未だ此の言葉聞き及ぶべからず。此の言、もとは、唐の太宗の語に出でたりと云へど、又未だ考ふべからず、讃岐もふるき語をとりて云へるにや、もし巳が心より云ひ出でたる言ならむ孝志ありつる婦人なりとひめ鑑にも云へれど、例へ巳より出でたる言になく書をよみて知りたる言葉とて、さやうに深く感じたるは、いかで孝志なくてやは。

此の沖の石の女房、またつねによく十三經をよみあかしたり。而して常に云ひけるやう、道徳仁義は人の食なり、これを得るときは山中海底にもよく身を養ひ、これを失ふときは、帝都金殿の中にも餓死するものなりと云ひけるとかや、つねによく身を愼しみ、院につかへまつりて、忠心深く、過ちある事なかりけるも、よ

く書をよみ、よき歌を身に修めたれぞにこそ。そのよみける歌あまたある中より三つ四つをとり出でなむ。

つねよりも山の端白きあけぼのは
夜の間にさける櫻なりけり

花留客人

去ぞしとも我はとゞめじ春のうちは
きとこむ人を花にまかせて

二條院七十八の御時月のあかゝりける夜よもすがら南殿の花御らんじて曉近くなりて里へ出で次の日まゐらせたりし

花ならず月も見をさし雲の上に
こゝろむかりは出ですとそしれ

御かへし

出しより空に知にき花の色も
月もこゝろに入ぬ君とは

里に居て後に花はいかゞなぞうちわたりて尋ける席に

思ひきや雲井の花の咲きさかず
人傳にのみ聞かむものとは

春のくれのうたあまたよみたりし次に

身ひとつのなげきならねぞくれてゆく
はるの別れを問ふ人ぞなき

旅のやどりの時鳥

もろともに旅ねするよの郭公
梢やなれの庵なるらん

尋ねてあやめを引く

長きねにあかぬ心をしるべにて
まだ知らぬまの菖蒲をぞひく

ふくる夜の鵜河

さきた川くだす鵜船にさす棹の
音寒るまで夜は更けにけり

たけの内のほたる

河竹のよごとにともす篝火は
やとるほたるの光りなりけり

泉に向ふて友を待つ

獨のみ岩井の水を掬びつゝ
底なるかげも君を待らし

風そよぐならの木かげに立ちよれど
うすき衣ぞまづしられける

なにはがたみぎはのあしは霜がれて
なだの捨舟あらはれにけり

水鳥の上げの霜ははらへども
下の氷やとくる間もなき

逢ふと見る夢をさめつるくやしさに
またまどろめど叶はざりけり

今はさは何と命をかけよとて
夢にも人の見ゑずなるらん

雨中歸戀

徒に歸るそらよりふる雨は
分けて袖こそぬれまさりけり

忍びて心を通はす戀

人知れず下に行かふあしのねや
君とわれとがこゝろなるらむ

内々に思ひを述る心をあまたよみあひたりしに

我もまたふりなん事の近ければ
長柄のはしをよそにやはきく

春日山生そふ松の枝毎に
木高くならんかげをこそまで

御製　人の袖をもと云ふ歌を御らんじて

ぬらさるゝ其の袂にはあらねども
きくに朽ちなんことぞはかなき

御かへし

かずならぬ涙もいかにしられまし
人の袂をぬらさゞりせむ

中宮の御方にわたらせ給ひて女房のからぎぬをとりておはしましたりしを尋る人もなかりしかど二三日どかりありて返し

おかせ給ふとて結びつけよと仰せられしかど

思ひかね返しつるかなから衣
　夢にも見つるぬしやなりとて

春の頃こんとたのめたる人のさもなかりけれど夢に見にけるしるもなき心地して

春のよの夢には人の見ゑしかど
　さましからでも過にけるかな

壽量品の心を

けふきけど光りもふかき月かげを
　出るはじめ思ひけるかな

賴政いみじき歌よみなり。さぬき、又かくれなく歌をよみ、祖先の面目を保ち、且、君に忠、良き女房なりける、また女だちが鑑とするに足りぬべし。

遊女花岡

松竹居主人

色のみかをゝりも清き花はちすこひぢに生ひしものと云もなしと舌敏からぬおのれが口よりもうめきいでらるゝ傳記は、つたなき禿筆にものせむより、その當時公よりたまはせる沙汰文によるこそまさりぬべけれ。

御沙汰書

淺草山宿町
　所持地面に假宅罷在候
新吉原江戸町壹丁目
　家持遊女屋
　　玉　屋　山　三　郎
　抱遊女やす事
　　　花　岡

其方武家娘にて實父病死後兄相勤候處致出奔候に付母ふき儀幷姉いのを連屋敷を退身いたし駒込世尊院

前徳五郎店林藏方へ再縁いたし候處繼父林藏儀多病にて渡世をも成兼暮し方差支候を見かね致身賣身代金をもつて取續候樣申出當主人方へ身代金拾八兩にて遊女奉公に住込右金子を以取續致させ候處去る丑年中林藏病死いたし後家くらし賃仕事いたし根津門前町庄八郎店に罷在候處去る夘年十月地震にて長屋潰れ駒込千駄木町御林跡地又八郎店へ引移候處翌年八月大風雨にて長屋潰れ菰はりの小屋内に相凌居ふき一人の手業にて漸々いとなみいたし候處厄介多く難澁を察し客よりもらひ受候金子之内其方は聊の品にても買求めず厚く心掛月々金貳分三分づゝ折節衣類等相添母幷兄弟へ相送り遊女に相成候頃より追々金五拾貳兩見つぎとして相送り其方は實體にて重立候遊女玉かつらに附新造と唱へ萬端深切に世話いたし遊女の内心得違のものへは歳若の内より教諭を加へおのづから遊女どもの風俗もよろしく主人のためにも相成遊女の身にて母に孝養を盡し兄弟どもへ慈愛を加へ候段別て奇特之儀に付爲褒美白銀三枚とらせ遣す

閏五月廿六日（安政四年なり）

花岡母

駒込千駄木町御林跡地

又八郎店林藏後家

ふき

同人姉

いの

同人弟

定七

金太郎

同人妹

かね

右之通於北御番所被仰渡候



茶の湯

茶禮初學

孤峰庵碌仙齋不美
關　葦雄

茶の湯の時薄茶を廣間通して客に振舞の段

偖御咄が跡へ戻りまして、濃茶終り、薄茶を飲するに至り、廣間へ通して振舞んとならば、濃茶入、茶杓、修覆を取入れに出、引入、後出て、偖は御退屈に可有之、又此處にて炭を直し、薄茶可ニ差上一なれ共、廣間の方へも釜掛置候間、路次よりとか、又は座敷よりとか、彼方へ御通り可被降と云て、勝手口を締切べし、客方は、夫は又御心入にて、別して難有御路次通り可ニ罷出一と挨拶すべし、隨て上客は、床の花を倚再見し、次に炉の方へ廻り、釜の名殘を惜しみて、濳口より出て、徐に歩きて廣間設けの席へ通るべし。次容以下も同斷、末座は出て濳口の戸を立切べし。偖廣間の入口は、縁側にもせよ、土庇にもせよ、上りたらば草履を片付置べし。(但し踏段石に立掛べし)次に障子を明け、入て床前に至り、畏りて一禮をなし、掛物を拜見すべし。三幅對ならば、客居主居と見る、繪の物は下より上へ見上る書賛ものは、繪を見て後に賛を見る、禪語、又は偈、或は詩の類、哥、發句、蓮歌の類を胸中にて默讀し、音聲を上げて詠吟すべからず、何れも名、印影に心を用ゐて熟覽すべし、次に表具を見る、及軸卷緒の引方迄も心を用ゆべし。次に花を見る、是も茶法には花屋の賣花を不歡、庭の花、或は山野に生ずる天然咲を賞翫す、次に中床ある座敷ならば、其處の飾り

物をも拜見すべし。次に爐、或は風爐の前に往、釜、爐壇、爐緣、風爐は同しく釜、風爐形容、小板迄も注目して見るべし。次に棚物飾あらば、振向て、水指、薄茶入、棚と拜見して座に付べし。二客以下準之、則此處に通り、客方座定まらば、亭主は煙草盆火鉢等を持出進むべし。(但し是は通ひの者に爲出、或は前以て据付置も無妨、次に亭主も喫烟家なれど、煙具を持出、閑話をなしながら喫煙をなすべし。暫く有て爐中の炭を見て炭を可直旨を云て勝手に入、炭取を持出、炭を直すべし。炭手前は例の通、畳小間と違ひ、廣間に替る時は都ての道具悉く換るべし。炭おらば客方は拜見例の通り、又香合所望して拜見すべし。返す事も例の通り也。亭主は出で是を持入べし。次に客方は此所にて道具の箱書付類を所望すべし。亭主一應は辭すと雖、再應好まれたらば、前號に示したる如く、箱の蓋書付類を取揃へ持出、上客の前へ進むべし。上客は此書付物を段々見て廻すべし。又不審の廉ある時は、亭主へ質問すべし。亭主は、夫は誰、是は何某と云事を明瞭に解釋すべし。そこで客方は、道具手控帖に書留べし。末座迄廻り見終りたらば、主方へ返すべし。此間に釜は必定沸立べし。次に主方は、湯熱したる故、薄茶をまゐらすべしと云て、乾菓子を持出進むべし。次に水指を持出、置付、次に茶碗、茶入を持出、水指の前に置合、次に飜蓋置を持出、薄茶を點出すこと、小座敷と差違あることとなし、客方薄茶を喫すること例の通り、又點仕舞たらば、水差の蓋をしめたる時、上客は薄茶入、茶杓の拜見を所望すべし。

(以下次號)

新撰結物百種

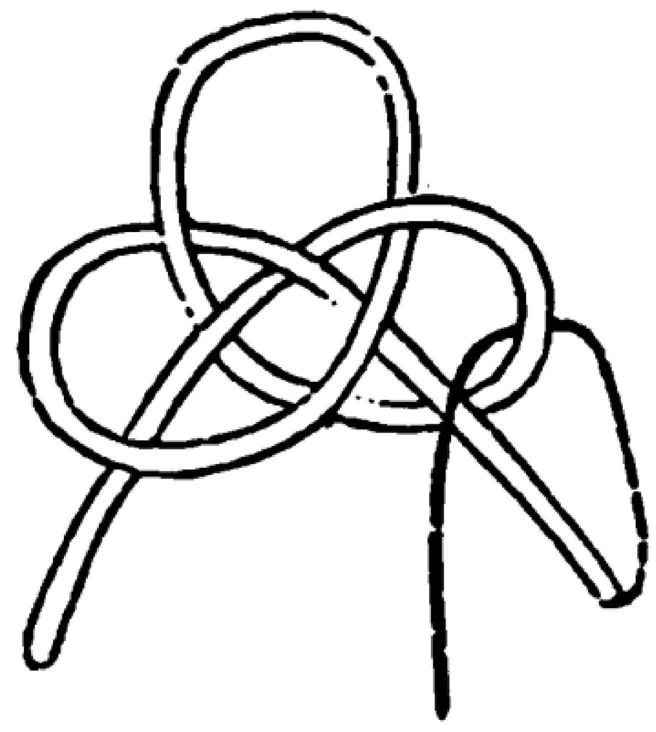
百草庵一無



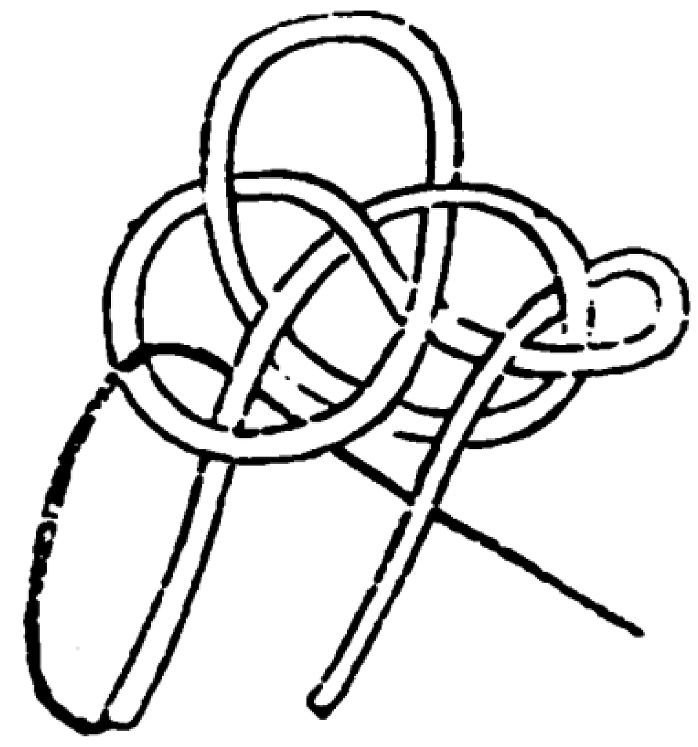
三ッ輪取結 32

是は多く佛具に用ら、猥りに他のものに用ゐるはよろしからず。

第一圖

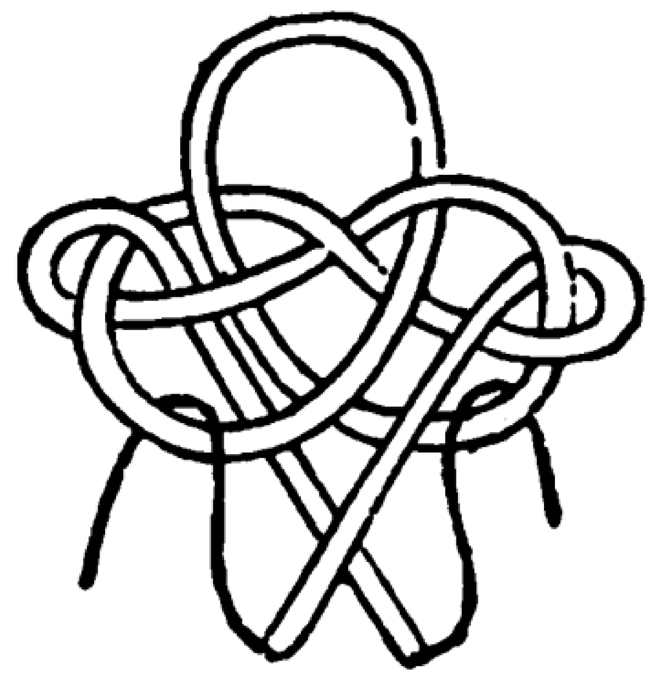


第二圖

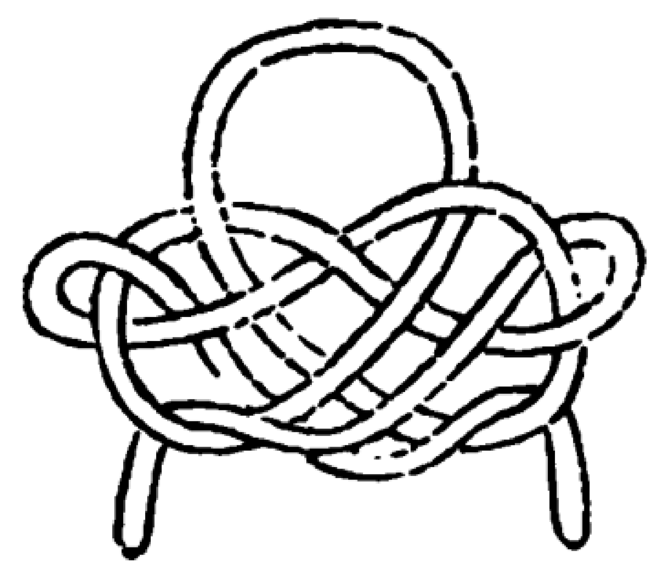


結び上り

第三圖



第四圖

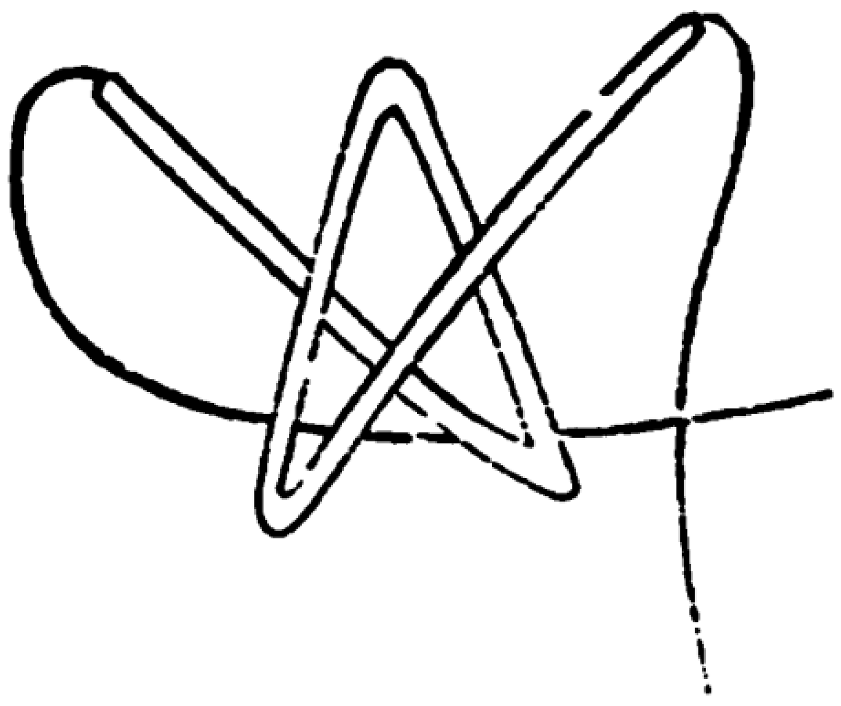


結び上り

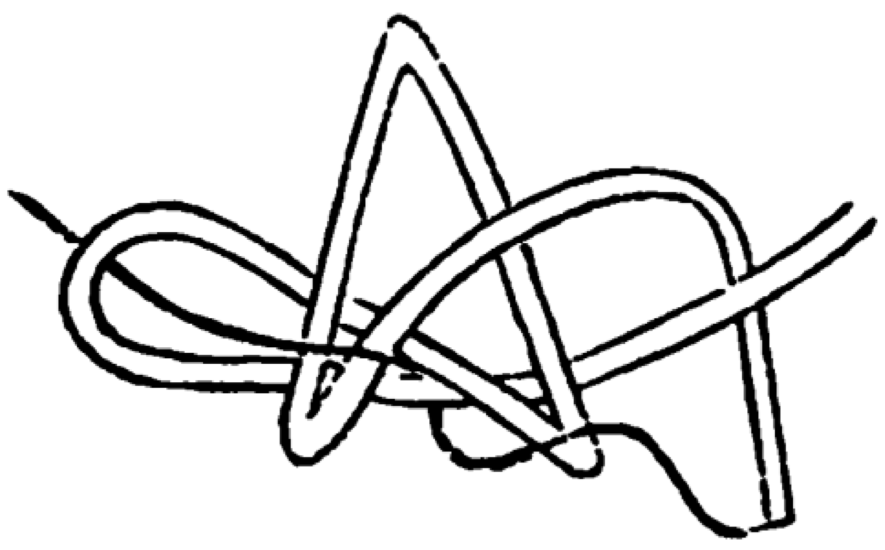
四ッ淡路 33

是は四ッ手とて、婚禮の時水引の結に用ゐること多し。一本の物にて、四ッ手を組む時は此の分至極便利なり

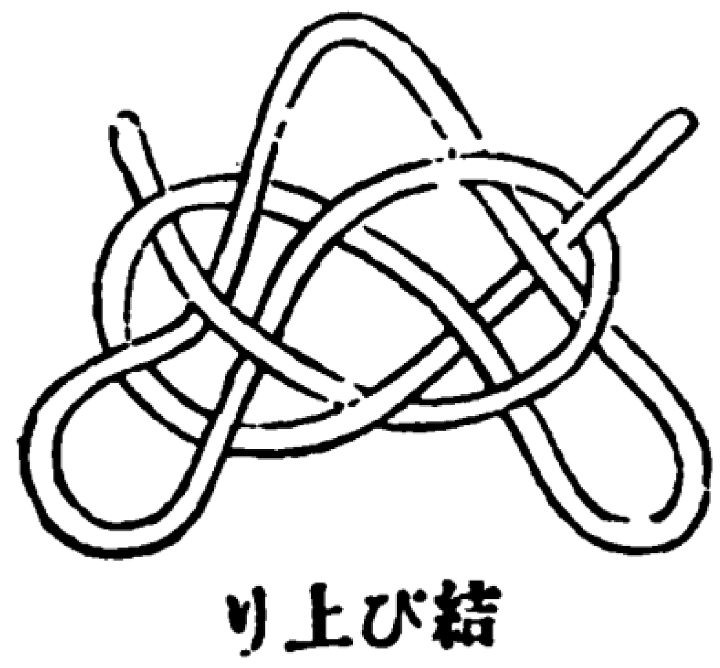
第一圖



第二圖



第三圖



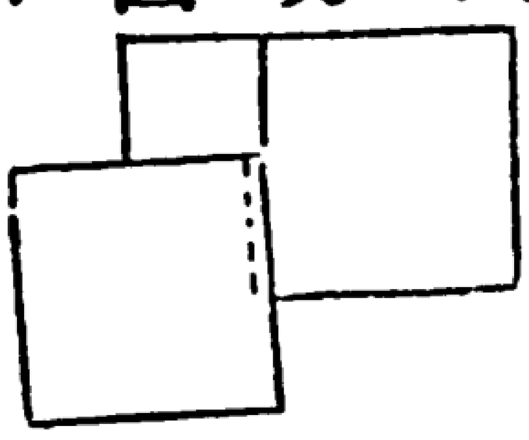
結び上り

たちぬひ

西山たい子

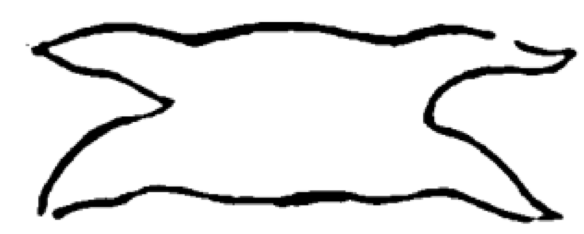
(百八)犬のぬひ方

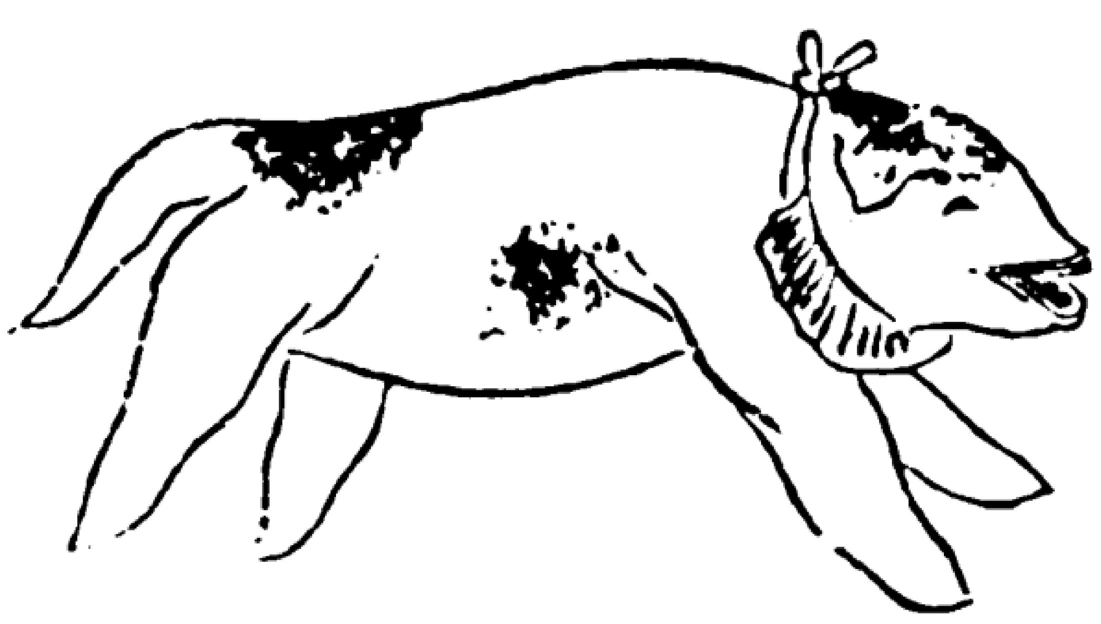
之は手遊なれど、春長の仕事にはまた一興にて、我子をはじめ、人の子のあいそうなどにぬひおく亦あしからず。先づ首は一寸四方の四角の布二つ、四分四方の布一つをたち、圖の如くにぬい、其小さき四角のものを口とし、大なる布の一つを首とし、一つをおとし、綿を



入れ圖の如くぬひ、洞はまづ猿の如く、長さ三寸、巾二寸ばかりの布の四隅を、猿をぬひし如くぬひ、綿を入れて眞中をくけ、圖の如くなせしもの〻、一方に首をつけ、他方に尾をつけ、涎掛をかくべし。大小は見計ひて適宜につくるべし。元より遊び物なれど、形などは如何樣にも工風しておもしろくぬふべし。







出來上り圖

だいどころ

ケンチエン卷

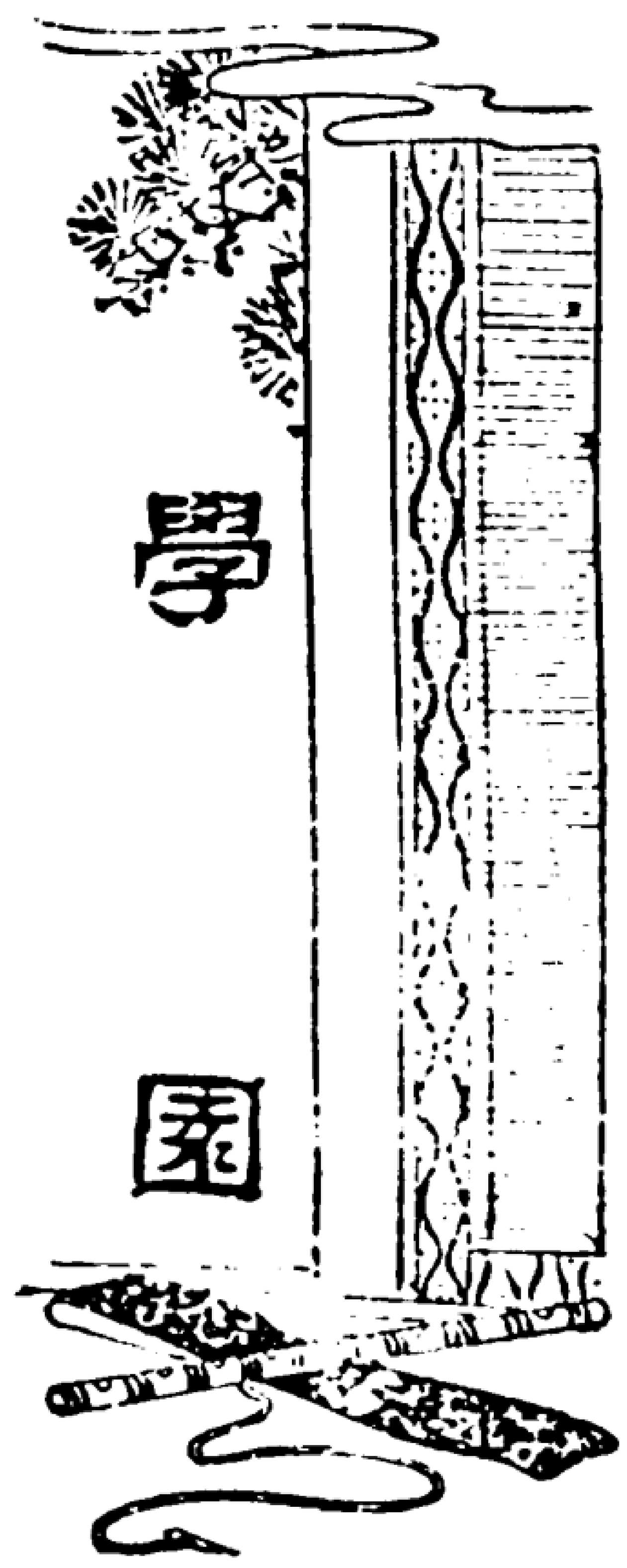
先づ豆腐一つを四十程にきり、胡麻油にあげ、一つを二ツわりほそくきり、栗皮牛房せんにきり、木耳、はす、芹こまかにきざみ、銀杏ふたつにわり、合せて凡五合位のかさに、油五勺程の割合にて、油を沸騰て、前の品を投れ、能くかきまはし、煎りつけ、醤油にて味をつけ、さまし置、ゆばを水にひたし、板にひろげ、其上に前の味つけたる品を四五分程の厚さにのせ、たひらになし、よく卷つけ、卷とめに葛粉の堅くこねたるものをぬりつけ、胡麻油にてあげ、七八分位にきりケンチエン酢にて用ふ。ケンチエン酢は、酢醤油にしぼり生姜を用ふ、又前の油にていりたるものをゆばにてまき、油を用ゐず、醤油味淋等にて味つくるもよし。

牡丹豆腐

豆腐一挺を二ツにきり、かどをとり捧の形になし、まるあげにし、小口ぎりになし、昆布の煮汁にて山椒を加へ、能く煮たるのち醬油にて鹽梅し、淺草のり、おろし生姜を添て用ふ。

百合燒出し

百合根をへがし、よく洗ひ、水をきり、鍋に油を少し投れて、火のまはりたる時百合を投れて煎りつけ、醬油にて鹽梅し、胡椒、又は木の芽抔添て用ふ。



源氏物語講義（廿四）

下田義天類

うへもしかなむ。『我がみ心ながら、あながちに人目おどろくばかり思されしも、長かるまじきなりけりと、今はつらかりける人の契になむ。世にいさゝかも、心をまげたることはあらじと思ふを、唯この人ゆゑにて、數多さるまじき人の恨を負ひしはてくは、からうち捨てられて、心をさめむ方なきに、いとゞ人わろく、頑になりはつるも、前の世ゆかしうなむ。』と、うち返しつゝ、御しほたれがちにのみおはします、と語りてつきせず。なく〳〵『夜いたう更けぬれど、今宵過さず、御かへり奏せむ』と急ぎまゐる。

以下靫負の命婦の詞なり。

○うへもしかなむ。　この句の下には『宣ひし』などいふ詞を含めて省きたるなり。陛下＝の仰言も、只今の御物語と同し御趣旨なりとなり。

○我が御心ながら云々　以下前の世ゆかしうなむまで『』を圍みたる所は、命婦の物語中へ、陛下＝の御詞を差し狹める所なり。我が御心ながら、自分一人の量見でなどいふ意の詞なり。○あながちは無性になり。○人目おどろくばかりおぼされしも　陛下が

御息所を御寵愛遊ばされしさまの、人の目をおどろかすばかり御執心なりしもの意なり。人目おどろくばかりとは、前にも『上達部上人なども、あへなく目をそばめつゝ、いとまばゆき人の御おぼえなり』などありしことをいへるなり。

○長かるまじきなりけり。斯様に愛情の深かりしは、連添ふことの長くあるまじき前表であッたわいと云ふ意。

○今はつらかりける人の契になむ。十年の愛情を一年に集めたるが故に、斯様に兩人の間の濃かなりしかと思へど、昔御息所の柔婉貞諒、陛下の御意のまゝに仕向けたる擧動が、今となりては、却りて　陛下には、御不滿足に御思召さるとなり。即今少し不充分なる所だにありしならば、かく人目を驚かすばかりの寵愛もせず、長き契を結ばましものをと、其の柔婉貞諒なりし所が、却りてつらく思し食さるとなり。母北の方は　陛下の御寵遇が餘りに厚かりし故に、此の愁傷に逢ふよしに思ひ、陛下は御息所の宮仕が、餘りに親昵なりし故に、此の悲歎に陷入りしやうに思食す由にて、双方うらうへのやうになれども、其の落入る所はいつ方も同じやうなりとなり。双方の痴情寫し得て妙なりといふべし。

○世にいさゝか人の心をまげたる事はあらじと思ふを、陛下の日嗣知しめしてよりこのかたは、聊も民と心をまげて、非道を行ひたることはなく、務めて仁政を施したるやうに思ふのをの意なり。

○唯この人ゆゑにて、數多さるまじき人の恨を負ひしはて〳〵は云々。然るをこの御息所の爲に、遂非曲をも遂げて、萬人の恨を買ひ、弘徽殿、後涼殿の方々より始めて、月卿雲客の惡しみを受け、上句の果には、其の根本たりし御息所にさへうち捨てられての意なり。天下の恨を買ひたりとも、同じくは兩人相並びて長らへた

らで、慰むる所もありしならむを、その御息所にも罷去りにせられたりとなり。さるまじきは然有るまじきなり。恨みられずともよきものにまで、恨みられたるよしなり。

○心をさめむ方なきに　をさむるは鎮靜することなり。　陛下は右の次第にて、神心錯亂して、御心を鎮靜すべき方法を知し食ぬにとなり。

○いとゞ人わろく頑になりはつるも云々

人わろくは人目あしくなり。外聞のわるき意なり。かたくなは、頑愚の意なり。さきの世は前世の宿因なり。前世の因によりて後世の果を生ずと佛經にても説きたれど、今　陛下の外聞あしく、頑固になり果てたるも、前世の惡因によることとなるべし。その前世宿縁は、如何なる惡因ありしか。夫を知りたしとなり。ゆかしといふ詞は、よきことにつけあしきことにつけ、見たし聞きたしといふ心の情態なり。以上は　陛下の仰言なり。夫を命婦が今噂話に、母北方へかたる所なり。

○うちかへしつゝ　幾度となく繰返し繰返し宣ふよしなり。こゝよりは命婦自身の詞にて、即、　陛下の御様子を語る所なり。

○御しほたれがちにのみおはします　しほたるとは涙に袖をしぼるよしなり。　陛下は斯様のことくりかへし〳〵仰せられて、泣の涙に袖を腐して御座るとなり。

○語りて盡せず。　命婦は　陛下の詞を、北の方に語りて、猶盡ぬ別を惜んで居たりとなり。

○なく〳〵夜いたう更けぬれど云々　なく〳〵は句を隔てゝいそぎまゐるといふ所へ係れる詞なり。前に夜更け侍りぬべしとて、急ぐとありて命婦は、頻りに歸參の晩れむことを恐れながら、盡きぬ名殘を惜みて、思はず猶語りあふほどに、夜はいよ〳〵ふけたるなり。いたうとある詞に心をつくべし。○今宵すごさず、夜明けて復命せむことは畏けれど、今

晩を過さず奏上せむとなり。○急ぎまゐる。涙の袖を乾しもあへで、泣く〳〵茲を辭して、參内の途に上りたりとなり。

右の大意を申せば、命婦は前段母北の方の物語を聞きて、重ねて申すやう、

主上も貴方と御同様のことを仰せられて入らせられます。其の御詞に、陛下御自身の御心からでは有るけれども、無性に世人の目をおどろかすばかりに、御息所を戀しく思召されたるも、兩人の緣の末長かるまじき前表にてありたわいと、今は却りてその厚かりし御息所の御志が、不滿足に思ゆる程の契である。元來朕今迄一生の間に、未一度も、世間の人の心を曲げて事を行ひたる事はさら〳〵有るまいと思へど、唯此の御息所の一事につきては、恨まれ[illegible]ともあるべき人のうらみを夥多身に負ひ、其の上句の末は、死なば一所にと契りたる御息所にも、かやうに打ち捨てられて、今は吾と吾が心を取直すべき方法さへ付かぬ上に、一層外見わしく、頑固になり果つるも、前世の宿縁いかなりしかと、ゆかしく思はると仰せられて、くりかへし〳〵私共に仰せ聞られて、あけくれ御涙がちにのみ御出なさると語りて、盡きる期なし。されど、かくて果つべきにあらねば、先刻より語りつゞけて、今は夜も痛く深更に及びたれば、今宵を過さず、御復命申し上げむと、泣きながら蒼黄として參内の途に上られたりとなり。

附けて云ふ。筆者の山川が假に手許を離れました故に遂手廻り兼ねて前回は休み座した。此の度はある者に書かせて見ましたが何やら思ふ樣に筆の廻らぬ所が有ります。然るに源氏は彌佳境に入り次回よりは五十餘帖中第一の名文と云ふ所へ差かゝりましたから拙いながら自身に筆を執る事と致します。前回のおこたりと今回の興味少きは何卒御用捨を願ひます。又此の講義に付きて徃々質問せらるゝ方がありますがこれは演者にとりて誠に辱き次第と存じますから何篇でも御遠慮なく御尋ね下さいませ。精々速

に御返事致しませう。但思違へをして間違つた事などもも定めて有るでありませう夫も御斟酌なく御糺を願ひます世に益ある事は本誌へ掲載することも有りませう

下田義天類　再白

布美安波勢（四）

白松園主人寄

閏四月　あれたる家にをみなことひく

左　持　徳

こけむし、草おひしげりて、いたうあれはてたる家にいみじうことのねしけり。いとあやしきにたちよりて、ついひぢのくづれより、やをら打みれど、いとようけさうしたるをみなの、そらをうちながめて、こゝろぼそげにうたひつゝ、想夫れんをひきゐたるこそ、かぎりなくあはれなりけれ、

右　保世

なつもや、ふかくなりゆけど、ひるのあつさをわすれんと、あたりちかき川ぞひの柳陰にたゝずみゐたるに松風にかよふしらべの琴の音、ほのかにきこえくるは、いとなつかしく、したひゆきみるに、家のさまはをかしく作りなしたれど、めぐりの垣はくづれがちにて、さしのぞくに、とりつくろふべき人もなきにや、草おひしげり、軒〇のよもぎは、所えがほにおをみて、母屋ははしとみ、ふたまどかりあけて、かけわたしたるすだれに、をかしきひたいつきのすきて、かきならすねの、あらはにみえけるは、えもいはず、いとらう〱しきひめ君の、かくあれはてたるすまひは、父君にやおくれ給ひけん、かひ〲しきうしろみのなきにや、とおもひやれど、いとほしくむねふたがりて、

評判　ふた文とも、すこしのきずはあれども、左はことすくなるものから、あはれふかく、右は、ちからいれたる所みえたり、持とすべし、

左　　祝之

夕やみの山路、たどる〳〵行くほどに、こえはてゝぞやう〳〵月はさしいでたる、おこなふかねのちかう聞ゆるは、横川のあたりなるべし、谷のほどは、いとゞこぐらう、ものむつかしう、過ぎ行くに、あやしう、所のさまにはにつかはしからぬ物のね聞ゆれど、立ちとまりぬ、あれたる家の、かたへはやぶかげにて、はしとみめく門を、かりそめにさしおろしたるも、あらはなれど、やをらかきのくづれよりさしのぞくに、こなたのさうじは、みなひきはなちて、はしちかう大かたうちとけてはみゆれど、くまなうさし入りたる月には、さすがにそむかひつゝ、つく〴〵と眺がちに、たゞ折々心やりにかきなして、打ちしめりたるかたはらめ、いたう物おもひ顔なりけり、年のほど廿五六なるべし、心もとならずねびとゝのひたれど、物おもふけにや、すこしおもやせて、中々らうたけにむげにをさなきさましたり、すゞしか何ぞのひとへを、しとけなうきなして、手などはいたうひきかくしたれど、おのづから白うすき通れるこゝち、すべてさまよくもてしづめたるやうたい、あらまほしう、山がつなどのむすめの、くちをしきにはあらざめり、あやしうみぐるしきすまひにもあるかな、とこなたかなた見もてやるほど、有明のかげいたう更け行きぬ、草がちなる前栽に、さと吹きわたれる風の音に、外のかたを打ちながめて、夜はにや君が、としのびやかになきつゝ○琴をとおしやりつ、さりや思ふ人こそあなれ、かう世をなれたる山さとに、草深うひとりおしかくれてげに人の住うくかれ〴〵にかけはなれんとせど、いとゞたつきなう、これよりも又あれまさりぬべし、とおもふに、心よわく、我だにおしのごひぬ、なかなりなるものゝねに、ひかれて、いとかく、あはれなるめをみるになん、

右　勝　　清風

ひえの山にのぼりけるに、峰々、谷々、見ありきて、たそがれどきに、からうじて麓のさとにいたりけれど、

しづが家々、所せき中に、琴のねの峰の松風にたぐひて、ほのかにきこえけれど、かゝる所にさへ、かくやさしき人の住みけるかと、あやしみながらみわたせど、すこしゐくまりたる所に、小柴垣のよしありげにみえけるを、やがて立ちより、ついぢのくづれよりさしのぞけど、あれたる家の物さびしきに、夕月の木の間よりさし入りて、をさ／＼しき人も見えず、いとあはれになん見なされける、よはひはたとせどかりの女の、月にむかひて、琴かきならすかたちの、うるはしくうつくしげなること、さらにこの世のものにもにず、あや錦をきて、玉のうてなにかしづかるゝ人にやおはしますらんを、かゝるはにふの小屋に住みたまふことのいぶかしさよ、とみるをりしも、十あまりのわらはの、をかしげなるがいできたるを、さしまねき、こは誰人のわたらせ給ふにか、ととへど、都がたより此二三月こゝに、とのみいひて、をさ／＼いらへもせずいりぬ、さて、かくやむごとなき人の、おやもかなしうおふしたてたまひぬらんを、何のゆゑにかは、いつきかしづく人もみえざめるを、いかに心ぼそくおぼすらん、といと／＼ほしくも、あはれにもおぼえて、見すぐしかたうなん、

評判　ふた文ともに、あはれにをかしくかきたる中に、左のは、いと／＼長く、ながきにつきてはよからぬ所々、おのれがひきなほしつるも多けれど、まけとす、かねて此文合は、みじか文ならでは、まさりおとりを見わくることのいとまとりて、くるしきよしをいひおきつるに、そのことしらぬがほにて、かく長々とかきたるは、たれならん、にくゝぞおぼゆる

左　持　　倚　文

父君うせたまひては、したしうまゐりつかうまつる人なく、御うちの人も、大かたいとまたまはりて、めのとの老人と、おのれのみのこりとゞまりて、いとほしきものに、思ひおきたまひし姫君を、かしづきたてま

つれど、はかぐ〵しき御うしろみもあらで、いたづらにあかしくらしたなふ、さるまゝに、いたうあれはて、かけわたしたるすだれも、なかむちきれ〇つ、いひちなどもくづれふし、軒をあらそひ、おひしげりたるむぐらは、さすがにかどのとざしなりけり、月かげのをかしうさしいりたる夜は、はしのかたにいでゝ、さうの琴かきならし、おはさうすふるめきすゝけたるひとへぎぬきたまひ、かみはすそよりもながう、ゆらく〵とかゝり、まみ口つきいはんかたなく、らうく〵し、故君のつたへたまひしねのかぎり、をかしうかきならしたまふ琴のねの大そらまでもすみわたりたり、かゝるけどはきわたりには、所えてすめるあやしきものなどのみ、いれやし奉らんこといど物おそろし、

右　　　重豊

おやがり聞え給へりし君の、すまずなり給ひてのちは、はかぐ〵しき御うしろみもおはせねど、姫君は、おけくれ、ものはかなきねをのみないたまふぞ、いともてことわりなりける、さふらふ人々もまかでいにかちにて、さうぐ〵しう〇われぬれど、はてぐ〵はきつねのすみかにこそ、とわかうどたちはいひしろひけり、ひきつくろはぬ木立どもの、去げるころはひなれど、くらうなりては、いとゞおそろしがりて、母屋のかたにかみしもとなくさしつどひゐぬ、さうしみはともしびを打ちながめておはすを、小侍従といへるぞいとかどある〇にて、去ひてつよき心をもてつけて、いさめまぎらはし奉る、こよひも、例の御琴をこそとてまゐらせたれど、けしきどかりかきならして、みぐしいたしとて、おしやりたまふ御ありさまぞ、いとほしき御ほげなりける、

評判　左右の文とも、姫君のさま同じやうなることにてよみくらぶるに、文の詞もまさりおとりありともおぼえずもちとす、



敎梯抄（續）

拾遺集秋

題しらず

小野宮太政大臣

くちなしの色をぞたのむをみなへし
はなにめでつと人にかたるな

夫木集秋

堀川院御時百首歌の中に

俊頼朝臣

みよし野のかたちの小野の女郎花
たはれてつゆにこゝろ置かるゝ

同　同

十題百首歌の中に庭叩き

寂蓮法師

をみなへし多かるなかの庭たゝを
さかなきことな人にをしへぞ

延文百首秋

延文百首歌の中に秋田

從二位有光

ふくかぜもをさまれる世の秋の田に
たみのくさ葉もみだれざりけり

後撰集秋中

惟貞の御子の家の歌合に

讀人しらず

秋の夜のつきのひかりは清けれど
ひとのこゝろのくまは照らさず

同

秋上

題しらず

源永法師

身をつめど入るもをしまじ秋のつき
やまのあなたの人もまつらむ

新古今集賀

久壽二年大嘗會悠紀方屏風に
近江國かゞみ山をよめる

宮内卿永範

くもりなきかゞみの山のつきを見て
あきらけき世を空にしるかな

玉葉集秋下

平貞時朝臣三島社にて講じ侍り
ける五首歌の中に

前大僧正源恵

世をいのるわがたつそまの峰はれて
こゝろよりすむ秋の夜のつき

新千載集秋上

建武二年人々題をさぐりて千首歌
つかふまつりけるついでに月を

後醍醐院御製

見る人のこゝろもなどかすまざらむ
そらにくもらぬあきの夜の月

新後撰集雑上

正平二年百首歌めされしついでに

後醍醐院御製

おのづから人のこゝろのくまもあらむ
さやかにてらせ秋のよのつき

新古今集秋下

入道前關白太政大臣家に百首歌
よみ侍りけるに紅葉を

皇太后宮大夫俊成

こゝろともみぢはすらむ龍田やま
松はしぐれにぬれぬものかは

冬　十八首

新葉集冬

五百番歌合に

散りかゝるよその木の葉の時雨にや
つれなきまつも色かはるらむ
關白左大臣

同　神祇

諏訪の大明神に法樂し侍りし千首
歌の中に
中務卿宗良親王

諏訪のうみやこほりをふみて渡る世も
かみし守らばあやうからめや

新古今集雜上

百首歌奉りし時
土御門内大臣

わさごとに河のこほりをふみわけて
君につかふるみちぞかしこき

新撰六帖

こほり
藤原光俊朝臣

うすこほりふみて仕へしいにしへを
おもひ出ればぞ身ぞひえにけ

（以下次號）

みちのく紀行（四）

▲は補
●は誤

故僧　均月

七日、鹽がまの浦におもむく、道すがらしやか堂にまうで、つゝじか岡の天滿宮を拜し奉る、うへなくへたる木々のこずゑしげりたる、下草は色はなけれど、春のおもかげおもひやられて、

春ならば花に分みん梅さくら
つゝじか岡にしげる青葉も

一むらこふかき杉のはやしをわけて、藥師堂にいたり、ねんじゆし奉りて、それより野にうち出で、かの宮城野を分みる、俗には生巣原といへり、野邊近く家居せるは野守などにやあらん。都のつとには、中にももとあ

らの里といふ所には、色などもほかにはことなる萩のありしとかけり。今はもとあらの里の名をしる人もなし。杉ところ〴〵にたてるあたり、七八町四方に、よもぎ薄などしげりたる野はらに、萩生ひまじれり、秋の花のころわけ見ぬぞうらみなりき。圓位上人の、秋風たちぬとよみけん風情もおもひやらる、

夏草の色なき露もみやぎのや
　おもかげうつる萩か花ずり

露けくも衣手すゞし秋風は
　さぞ身にしまんみやぎの〻原

花さかん秋をぞおもふみやぎのや
　まじるよもぎがもとあらの萩

この見わたしをまの〻かやはらといへるとなん。

わけ過るけふの月日は遠くとも
　まの〻かやはられもかげにみん

原の町といふ所を過ぐ、比丘尼坂をこえ、廣瀬川をわたる、十府の菅の在所を人に尋ねしに、此川上近きわたりなりといへど、行過ぎぬればかひなし。

里とひてしかましものをそことしも
　しらでぞ過し十府のすかこも

扨鴨の長明か歌に、みちのくの野田のすかこも片敷てかりねさびしき十府の浦風、とよめれど、このひろせ川を、古は野田の玉川といひしにや、ふるくは十府の浦とよみたる歌あまた見え侍れど、海邊にはあらず、いかさま浦近きわたりなれど、能因法師の歌に、夕ざれぞ鹽風こしてみちのくの野田の玉川千鳥なくなり、とよめる、げにもとればえ侍る。かへるさに又こそわたり侍らめ、やゝ行きて市川むらといふところより右のかたにわけ入りて岡山のほとりにいたり、壺の石ぶみを見侍る、瓦ふける一宇の小堂のうちにあり、石の高さ六尺あまり、石のかたちのまゝにてれもてをたいらかにすりて文字を彫りいれられたり、石のれもてにしにむかへり、まことにならの葉の名におふふるき世のものと見え侍り、碑の文は、當所に板にゑりてひさ

き侍るをもとめて、みぬ人のために圖し侍る。

多賀城

去京一千五百里
去蝦夷國界一百廿里
去常陸國界四百十二里
去下野國界二百七十四里
去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歳次甲子按察使兼鎭守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歳次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獵修造也

天平寶字六年十二月一日

神龜元年は聖武天皇 即位のとしなり。大野東人、大野多賀麿の子なり。多賀城といふもそのゆへあるにや、天平寶字六年、あわぢの廢帝御そくゐより四年にあたれり、朝獵は惠美おしかつが第五なんとかや、此城ち、むかしは當國府と見へて、都のつとにも多賀の國府とかけり、こゝなんなかの杉山といふ所とぞ、

のこしをくむかしの跡をみちのくの
　つぼの石ぶみくちぬかたみに

このわたりをおくのほそ道ともいへるとなん。

はる〴〵とおくのほそ道ふみゝてぞ
　つぼの石ぶみあともとめきぬ

末の松山はこゝより南にわたりたる所にて、杉頭寺といふ寺うへにしげりたる杉山なり。鹽がまの浦のかたは見えず、海つらは松むらごしに見えて、はるかにながめやれむ、まことに波もこゆるけしき、えなれぬ勝地なり。

うき旅に袖こそしぼれおひの波
　こえしいそぢのすゑの松山

夕かけて鹽がまの浦にいで、先づ明神にもうで奉る、松杉しげりたる山のうへに、くわいらう、あけの玉がきかう〴〵しくしわたして、右宮おひならびておはします、別宮は猿田彦命にておはしますといへり。右宮左宮の御垂跡を社たうに逢ひて尋ければ、さだかにい

らへず、いと口をしき事なり。やがて別當寶蓮院に行きて、書院より鹽がまの浦をてうぼうす、をちこちの島々のけしき、籬が島、千賀の浦つゞき、絵に書くとも筆かぎりあるべし、鹽がまにゝたる所なしと書きたるもむべなるかな、折ふしつり舟のこぎくるは、ちひさき鳥のうかべるばかりに見えて、浦こぐ舟のつなでかなしもと、いまも心ひかれ侍る、

夕けぶりたつをしるべに鹽がまの
うらこぎかへるあまのつりふね

鹽がまにやどりはとらん夕ぐれの
まがきが島のあかぬみるめに

鹽がまの前にうきたる浮しまとよまれたれど、とはでもそれとしるく見えて、えならず、

鹽かまの浦風すゞし夏としも
いざしら波にうき島の松

山をさがりて鹽のさし入細江の橋をわたる。こゝより濱近き所に物ふりたる松たてる所に、ゐがきしわたし内に鹽釜四口有り、これをおかまといへり、神器と見えたり。此浦の名もこれによりて申すにこそ、その近きわたりにやどりぬ。すべて此浦を千賀の浦ともいへり。

磯まくらちかさとへだつる古さとに
かよふ夢路はちかの浦波

八日、海士の小舟をやとひて松しまにさし行く、まがきが島をこぎ過て、

こぎ過し名ごりも海士のとまやかた
籬か島をなみにへだてゝ

松がうらしまを詠やりて

心ある海士にやとはんなみなれて
いくとしへぬる松がうらしま

寺が崎といふ所、昔はおくろざきといへしとかや、三つの小しま、都島などをこぎ過るとて、

人とはゞ都のつとにかたらなん
三つの小しまをみつとばかりも

すみなれし名もむつましき都しま
　波のまもなくわかるゝぞうき

よろひ島といふ小島に船さし寄てあがり、しぞし島々をてうぞうす、八十島かけてすめる月影などよまれたれど、かぎりなき風景は、千島にもあまり侍らんかし。伊勢島、小町じまといふ名も、さるけしきにておかし、びしやもん島、ほていじま、大こくじま、いびすじま、ゑばし島、かぶとじま、ほとけ島といふは、そのすがたにゝたれぞかく名づけつらん。こゝかしこゝぎめぐりて、松しまの磯にふねさしよするも、名ごりれしく、わりなくあがりぬ。

船さしていつかきにけん鹽がまの
　浦よりつゝく千しま松しま

やがて此磯邊にむかへる所をかり出てとまりぬ。二階なる所より暮るまでうち詠て、友どち旅のおもひをわすれてかたらへぬ。

ちとせをもこゝにやへなんあまのかる
　みるめにあかぬをしま松しま

年をへてかけしねがひもみちのくや
　れもふ入江の波の松しま

聞しにもいやまさりたる絶勝なれど、

とふ人にいかにいはねの松しまや
　たしまのあまのことのはもなし

瑞巌圓福寺、方丈陽徳院、天麟院、圓通院みまはり、竹の浦法性院、梅がうら向陽院など見物してかへりぬ。いづれも禪刹なり。西行もどしといふ山路にのぼりて見侍りしが、松しげりて江上の遠望さだかならず、そのまゝ下りて五大堂にまうでぬ。松島の磯の東のかたにさし出たる岩がねより、橋を二所にわたしてかよふ小高き島なり。海にむかひて一宇有り、五大尊を安置せり。岩の上に物うち敷き、夕月を待出たる、みるめはれたるきさつ鹽風いと涼し、こゝにして夏をすごさまほしくこそ侍れ、

なつの夜の月まつしまのみつしほによせくるなみし

光りすゞしき
暮過ぎて、沖の島陰よりいさりびほのかにみえたる、いとおもしろし、

松しまやみるめすゞしきなみの上の
ほたるぞかりにてらすいさり火

西のかたに、岡山よりつゞきて高くさし出たる所に、槙のいたや、きら〳〵しくつくられたる所あり、月見がさきといへり。これなん仙臺の府君遊眺の所なりといへり。

夏のよもたゞひはなみの松しまや
月見がさきの秋をしぞおもふ

磯山陰にかたふくまで月を見侍りて、

まれにきてみじか夜つらし松島や
をしまの波におくる月影

九日、けふも日和よけれど、海士小船にさはさして留山の觀音にまいる。松しまより東にわたりて、海路二里ほと有りとなん。經しま、とくらじま、九のしまおきれしまは、いくよへぬらんとゝはまほし、磯さきといふ所は、鹽やく海士の家居あまた見えて、いとおもしろし、やがて山かげに舟さしよせてあがり、岡部をこえてはる〳〵と田づらをつたひ、里をわけてふもとにいたる、七八町ほどのぼりて山川にいる、留山とかける額は支那高泉筆なり、又門に入り大仰寺とかける額あり、觀音を拜し奉る、梵音閣は峩山月潭筆なり、大仰寺は臨齊宗也。書院より見おろしたる麓の入江の風景、百島くまなく見えて、松島にもおさ〳〵をとらず、しぞらくの遠望に歸路をわすれぬ。

みちのくのおもひ出にせんとみ山や
たゞひもなみの千しま百しま

こゝより東のかたに金花山みどりのまゆのけぶるごとく見えたり、海上十二三里ありといへり、

波の色もこがね花さく遠島の
日影にゝほふみちのくの山

ふるくみちのく山とよめるは此島山なり。山を下りて

舟よりあがりたる磯山かげにかゝる、名殘おしくおぼえて、浪間の小貝などひろひて、

松しまやかへらんたびもわすれがい
　わすれがたみにいざやひろはん

それより舟に乗りて、まつしまの西、大澤といふ所におしわたる、入りぬる磯山の陰よりあがりて、山陰にいたる、福聚山とかけるが有り、海無量寺とて、雲居禪師の塔院なりといへり。寂寞無人の地なり。又舟にうつりて雄島といふ所にあがる、道より木高くしげりたる木陰に、茅ふける一宇あり、雲居和尚座禪せられし所とぞ、今もふるき椅子などみゑ侍り。そこより一町ほど南へさし出て、松など生しげりて、あはれに心すごげなる所あり、こゝにも、一間四面に瓦ふける一宇あり、はかなくなりし人の白骨などをさむるこつ堂なりといへり。地藏ばさちを安置せり。うしろに高き一丈ほどの石碑有り、上に妙覺庵賴賢主行實銘と有り、下に巨福山建長寺住山庵僧一山一寧撰とあり。德治丙午の年號發語に見えたり。筆書にて、草むして文字さだかならず。德治は後二條院の御時なり。すべて、此島は當所の墳墓の地と見えて、なき人のしるしの石、こゝかしこにたてり、あはれにおぼえて苔の袖もたゞならずうち過し、

まつしまやをしまのあまの袖ならで
　世のはかなさにしほたるゝかな

歸るさは橋をわたりて梅か浦にいでぬ、此あたり松しま雄島とて、まぢかくつゞきたる所にて侍れど、今ははん花の地となりて、鹽やく海士の家ゐもなく、波にあらすなどよまれし苫屋も見えず、寺院旅店のみなり。

終

柿屋餘載

赤松景福

此編は聊か女子の省覽に供ふべきものもや。と思ひて書どもよりかき出たるなり。その取捨は善く讀む

人を待むとす。

京師の婦人に五の不善あり。饞也(食物を貪る事)懶也(懈怠る事)刁也(字義じかど)淫也(淫亂の事)拙也。四方より遊宦する人が、京師の女を以て妾とせるものを見に、皆貲力を盡して、飲食の費に供し、精神を敝してその欲を遂ぐ。後故郷に携へ歸るに及んでは、不和にして離別を求め、或は父母兄弟と爭論をするものあり。さやうの女にして、勤儉家を理るものありやと求るに、千百人の中に一二も得ること能はず。といへり。景福云、我邦にても妓女などを受出して、妻妾となすもの、間かやうの感あるを見る。

(右原文は五雜俎に見えたるを譯述えたるなり、下も同じ)

維揚といふ所は明國の中程にありて、川澤の風景秀媚なり。故に女子美麗多く、その性温柔にして擧止婉慧なり。所謂澤氣多女といふもの、亦その靈淑の氣の鍾る所にして、他方の及ぶこと能ざるものなり。さて維揚の人はこを以て奇しき貨物として、各地に賣買することゝなりて、童女の時より意を加へて裝束して、書算琴棋などの藝を附て、その高直ならむことを求む。こを名づけて痩馬といふ云云、景福云、此維揚の地美人を出すこと、我京都の水からこといふ類にや。

美人は世に一度も逃ざれど、妒婦に比屋封ずべし。(その多きをいふ)是亦君子少く小人多きの理なり。玄かして江南にては新安、閩にては浦城といふ所、妒婦尤も多く、その習となれりとぞ。景福云、我邦にては何處とさして、其多少あらざるべし。

妒婦相守るは是疣宛なるに似たり。世に勇は三軍の大將ともなるべき男にして、その威閨房に行はれず。智は天地四方に周きに足て、その術紅粉に運ず。首を俛し眉を垂れ甘じて妻妾の下にありて、或は憤を含み歎を茹ひつゝも、竟にそを咎むること能はず。是人間の一大不幸にあらずや。景福云、是等その夫をのみ言腐すべからず。夫權力を振ふことを知も、そを振ひ

妻を逐むには、子どもの養育を顧みなど、種々情と勢とによりて、家の爲堪忍する人もあるべし。然かるに其妻妾はかやうの所に乘じて、夫を下數になして、妄に己が威福を張ものあり。一家の爲に嘆ずべきことなり。

内(妻などを云ふ)を懼るゝものに三あり。貧賤相守り艱難備に嘗て、一度天日を見る時は(出世の時をいふ)復相制しがたし、是一なり。枕席恩深く、山河盟重く、愛を轉じて畏れを成し、溺を積て迷を成すもの、是二也。相應せぬもの丶配偶となりて、或は金錢の威によりて、一家の號令夫より出ざるもの、是三也。婦人男子の政に干むと欲すれど、必ず先その利權を收む、利權一度その手に入れど、則威福自由にして、僕婢帖腹す。男子の一動一靜彼必ずこれを知る。大勢既に成ど即ちこれを反むと欲すれど、得べからざるなり。

孔子、女子と小人とは養ひ難しといへり。書經に、紂は婦言を用ゐと記し。詩經に哲婦城を傾くと記せり。

すべて婦人女子の性一も佳きものなし。妒也(嫉妒の事)悋也(吝嗇の事)拗也(理に戻る事)嬾也(懈怠る事)愚也酷也(嚴酷き事)易レ怒也多レ疑也輕信也瑣屑也(心の小さき事)好レ鬼也(怪しきを好む事)溺レ愛也さて其中に妒を最も甚しとす。それ故に婦人一も妒せざれど百拙を掩ふに足れり、古今の妒婦書すに勝ず云云、景福云、さこそいへ、賢婦淑女世その人乏しきに非ず、且右いへる妒也悋也以下の事ども、有鬚の男子にも此類少からず。獨婦女をのみ責むべきものならじ。と、己は常に思へるなり。又妒を以て婦女の最も惡き條件として、古人いはれたれど、是も斟酌すべき所ありて、强ちにそをあしとのみはいふべからず。試に見よ、吾愛する夫の他に奪れなどするに於ては、そを好まぬは人の常として、妒心の露るゝも、それやがて一片の眞率なる情ともいふべし。(夫を親愛する眞情なきものは、自然妒心薄き事もあるなり)妄に嫉妒して驕暴邪淫なるが如きは、固より論ずる所にあらず

浮世いかだ舟

作者不詳

●浮世坊過去の世をさとりし事

今はむかし、うき世坊御まへにしこう申しけるに、主君いつよりもきげんよくおはしまし、いろいろざうだん有けるに、くすし通齋浮世坊にむかひ、そなたは何宗ぞといふ、浮世坊、それがし昔は淨土宗にて有しを、今は禪宗になりたりといふ。通齋かさねていふやう、禪宗は本來の面目をうしなはぬやうにたしなみ、古則をみるが専じやときこえた、空理の空の字はうつほとよむからは、鞠をける事かといふ。浮世坊いふやう、いやゝゝさうではない、古則をみるといふは、見性悟道して、三世をさとる事じやといふ。さてそなたにはさとられたかといふ、浮世坊聞て、現在の事はしれた浮世坊にてへうきんのとひかかりなれば申に及はず。次に未來はまだ悟らず、このほどやうゝゝ過去をさとりおぼえたりといふ。過去は何にてあつたととへば、蝦であつたとおぼえた、その證據は、因果經に、その現在の果を見て過去の因をしるととかれた、されば、蛙は水の中にては、のびつかゞみつし樂さうにみゆるか、道ばたへあがりては、もはや蹲ふてゐる飛でもゝゝつくばふてばかり居る。それがしも部屋へはいりては、ねたりおきたり樂さうなれ共、部屋をいづればどこでもかしこでも、ひざまづき、手をつきてゐぬ事ないほどに、さき生では蛙であつたらうとおぼえたといふ。通齋きゝて、まことによい悟道のしやうてかな。禪宗は教外べつだんのすゝめじやと申した。はかこはものじやとて主君大にわらひ給ふ。

●七草をたゝく狂歌の事

今はむかし、正月七日のあした、七草をたゝく、寅の一點より拍子をとりてかしましくうちたたく、そののちは雑炊にしてくふほどに、あまりすいた物ではないと思いつゝ、浮世坊かくよみて小性衆にかたりけり。

七草をいさはひげにはたゝけども
　　餅つくおとにはるか劣れり
かやうによみ、侍り、雑炊を御すきのかたはせひもなし、此歌の下の句のはるかといふはの字を、いかにも永く々とひいて吟して給はれとかたりき。浮世坊は雑炊がことの外きらひにて、そのかみ道心おこしける折ふし、世間おほいに米たかゝりけれど、寺に朝夕雑炊をかりをくはせけり。そのときかくぞ思ひつゞけける。
山田もる身ほども米をもたざれど
　　みそこつのみに飽はてにけり
とよみて寺をはいでにけり。

●釈尊七十九歳ねはんし給ふ事

今はむかし、浮世坊御前にしかう申せしきざみ、くすし通斎申やうは、つたへ承る、釈尊は七十九にして二月十五日に天竺狗尸那城跋提河のほとり、沙羅双樹のもとにて御ねはんにいり給ひけりと。御とし卅より七十九まで五十年の間に、いろ〳〵有がたき事、めづらしき事をとかせられた。百までも御ざありたらど、いかほど有がたい法門をとかせられうやらんしれまいに、はやう御ねはんにいらせられたは、のこりほい事じや。御坊たちはさてぞさやうに思ひ給ふらめといへど、うき世坊きゝて、いや〳〵はやうねはんに入給ひたがましじや、どうすの身もちをむつかしうしをかれて、女どうをもたせず、魚をくはせず、うそをつくな酒をのむなど、五十年のうちにさへかゝる事を申された、それを百までもいきて為られたらど、後にはうずには豆腐もくはされまいといふ。

幽中のすさび

故師岡正胤翁遺稿

左の数篇は、故師岡正胤翁（號節齋）が、そのかみ、幕府の專横を見て慷慨悲憤に堪へず、先づ足利の大逆を正し、天下の人をして勤王の志念を振起せしめんとし、文久三年二月廿二日の夜同士十数名とかたらひ、足利の菩提所等持院を襲ひ、尊氏、義詮、義満三代の木首を刎ね、其罪状を板に書して三條磧に梟し、捕へられて信州上田に幽閉せられし折、硯も筆もなく、袖口をしぼりて僅に其思をのべたるものなりとて、翁の遺子須賀子の君より寄せられたるものなり。

等持院の事を詠める歌幷に短歌

天地の廣きが中に　國はしも多にあれども　日本のこれの大和は　千萬のもとつ御國と　君と臣しな定りて　天皇の命かしこみ　もろ〳〵の群卿たち　忠實に仕へまつりて　萬代に動くことなく　大道は正しく立てど　枉津日の神のみわざと　勅命背き奉りて　天皇を惱ませまつる　醜臣もまれには有れど　狂夫等も世には出づれど　神直日神のこゝろと　して臣を罪し給ひて　狂夫等を罰むる中に　眞菅吉曾我の馬子　足利の三代の醜臣　事なくて世を終りきと　年久に慨わりしを　念ふ友家につどひて　世のさまを語らふ時に　たふれ等の事に及びて　今し世に蘇我の馬子は　その罪をせめむよしなし　打日刺す都の西の　某の寺に据ゑたる　足利の代々のしこ臣　その像の首引きぬきて　其の罪を糺すはいかに　快き事ならずやと　諸共にいさみきほひて　渡る日の暮るゝをまちて　雨まじり風は吹けども　風まじり雨は降れども　其の寺にいゆき至りて　並立てる像にいむかひ　雄健びて武びいへらく　高氏の醜の父子い　天皇に叛き奉り　諸王をなやませまつり　例なき國の罪人　くなたぶれ佞け義滿　戎國のかしらに乞ひて　其れが身を臣とくだして　皇國を汚す罪人　其の余の代々の醜臣　後世の毀を釀し　世中の乱を起し　罪のなき人こそなけれ　其のもとは佞け高氏　事なくて其の世過ぐとも　如何でかは許しれくべき　五百歳の後にはあれど　其の罪を今ぞ糺すと　打競ひ木首引ぬき　像をしも打砕かむとはやりつゝきそひたりしが　あな無禮首はぬけども　冠と綾の御衣は　朝廷に恐れしあれど　像にはも手だにふれじと　諸共にうちのどめつゝ　戰に勝ちしさまして降しきる雨もいとはず　吹きすさぶ風も思はず　鴨川の川瀬に至り　狂夫等の三つの木首を　板の上に並べすゑき　三芳野の方を拜み　鎌倉の方に備へて　其の罪を板にしるして　見る人はかたり傳へよ　聞く人は記しつたへよ　優れたる將軍も　其の世にはい向ひ佗びし

醜臣に我勝ぬたり　狂夫等の首を得たりと　はこり
かに言擧なして　諸共に勇み喜び　家に歸りつ
五百歳の昔に我輩生れなむ
かくしてましを其の現身を

聞芳野山塔尾山陵鳴動不堪恐惶作歌幷短歌

掛卷もあやにかしこき　あきつ島大和の國の
御こゝろを芳野の山に　行宮を高知まして
天の下しろしめしける　天皇の神の命の
塔尾の山陵どころ　雲さわぎ風は吹かねど
地とよみ地震はゆらねど　茜さす晝は終日
ぬむ玉の夜はずがらに　小止なく鳴動みつゝ
茂立てる大樹倒れて　もとほれる御墻崩ると
公にきこえたりけり　あなかしこ山陵の動み
あな忌々し御墻の崩れ　畏くも思ひまつれむ
天皇の神のみことは　くなたぶれ醜の奴の
逆事にたへまさすして　波荒き島にいでまし
嵐吹く山にこもらし　御念も晴けまさずて
逆鱗もなごめまさずて　離宮に神去りませむ
あら玉の年月たてど　往昔のみおもひ凝りて
顯世にみたまかよはし　世間に御稜威を示し
時につけ事によせつゝ　敷島の日本人はも
事しあらむ願みせずて　海行かむ水附かむね
山行かむ草むす屍　天皇の御楯となりて
醜臣にな服ひそと　世の人を戒めませる
大御陵なりの動みを　我はかしこむも

天皇は神にしましけり千年經し
山陵ゆるぐ御稜威れもへむ

大御陵鳴のとよみに天の下
皇の御いつを人かしこむも

鎌倉の右大臣の（やまはさけうみはあせなむよなりとも皇に二心我あらめやも）と云へる歌の本の句の十七文字を始に居ゑて其の心を詠める

○やまは浸り海は燃えなむ世なりとも
○まつが枝に花咲き實生り紅葉づとも
○はなれ駒くもいいを以てつなぐとも
○さくなたり落るたぎつはせきぬとも
○ける鞠はよし中空にとまるとも
○うき雲は風になびかず凝りぬとも
○みたずして空行く月はかけぬとも
○はに鈴の音は黄金にまさるとも
○おを海原しほの八百重はこほるとも
○せゝらぎに龍はひそみて年經とも
○な良山にすむさをしかはかぞふとも
○むら雀空行く鷹をとり得とも
○よこたてはなくて錦に織りぬとも
○なつ虫はれもひを音には立てぬとも
○りちと呂の音はみたれて交るとも
○とこよべに浦島の子は住みぬとも
○もゝ千度千里の駒は出でぬとも

皇に二こゝろ我有らめやも

今古六帖にありしと覺えし歌の末の句にひとのこゝろはいかでたのまむとある十四文字を句のはじめにおきてその意を云へる

○ひさかたの雲には乘りてかけるとも
○ときの間に唐には行きてかへるとも
○野飼する駒には角の生ひぬとも
○こがずして船は早瀬を登るとも
○こえずして山のあなたは見えぬ共
○ろかひたて船行く海はあせぬとも
○はし柱昔ながらにくちずとも
○いせの海ちひろの底は測るとも
○かけはしを馬には乘りて渡るとも
○てを以ちて流るゝ水をせきぬとも
○たなつもののあだし木草に實る共
○のに山にくさ木は生ひぬ成りぬとも
○ましら髮の老翁は兒子に返る共
○むさし野の堀兼の井はたぎるとも

人のこゝろはいかでたのまむ

正月廿三日

年毎の睦月の今日を　生日の足日と定め　氣吹舍大人の御許に　神御靈いつき祀らし　世間の忠實人つどひ國々の敎子まゐり　賑はしく語り合ふらし　睦しく酒みつぐらし　正胤のこれの我身も　其の中に打雜らひて　諸共に醉み笑ひみ　うらもなく有りつるものを今はもよ憂身にし有れど　思へども甲斐こそなけれ歎けども術こそなけれ　璞の年の一年　打思ふ事は多けど　こひ思ふ時は多けど　神御靈いつきまつらしにぎはしくさかゆる今日と　殊更にしぬびぞまつる大人の御許を

鞠歌

一つとせ　ひとりたちたる日本は〳〵　皇のかはらぬもとつ國〳〵

二つとせ　二人の親よりうけし身も〳〵　皇の爲にはをしからず〳〵

三つとも　三種の寶傳りて〳〵　とはに動かぬ高御座〳〵

四つとせ　よその國より攻め來なむ〳〵　いさをゝ立てゝ名を殘せ〳〵

五つとせ　いつきまつりて天地の〳〵　神の惠を祈まつれ〳〵

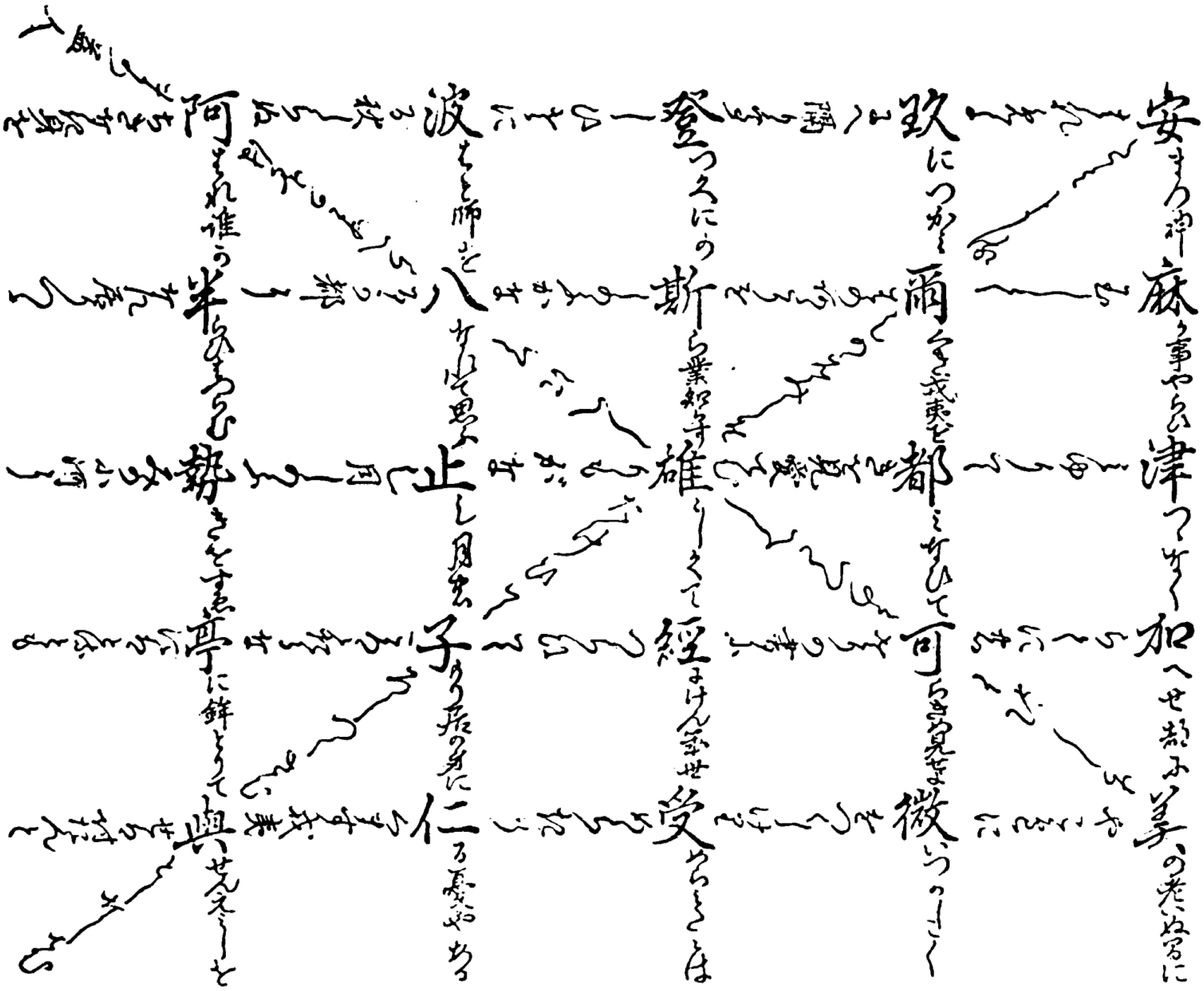
六つとせ　むかしにかへせ人心〳〵　よその侮受はせじ〳〵

七つとせ　名は惜しむとも益荒雄の〳〵　命惜むな國のため〳〵

八つとせ　矢よりも早き年月ぞ〳〵　たゞに過さずつとむべし〳〵

九つとせ　こゝろして讀め異國の〳〵　書はかざりの多かるを〳〵

十をとせ　とほき夷も末つひに〳〵　貢をいれてまつろはむ〳〵



毘沙門堂爲兼公事ありて佐渡の國にさすらひ給へる時、阿彌陀夫津　といふ五文字を襷にて詠みたまひきと聞く　我は其の歌の体には倣へど然る忌はしき言はいはず、　阿麻津加美玖爾津加微登斯雄經受波八止子仁安半勢亭與（天つ神、國つ神、時を經ず母と師にあはせてよ）といふ二十五文字をすゑて詠めり。あはれ天神地祇、拙けれど詠出る情を憐みまし御靈ちはひて禍事を神やらひましつゝみなく世に出だし給ひてよ。

家兄遺草（四）

白松園主人篇

松々記

新玉の年、いつしか立ちかへりぬ、松園は故郷に歸りて、母と共に迎へけり、

新玉の年たちかへるゑるしにや

みけたく今朝のけぶりかすめる

こは、父が世にいまそかりし時、あるとしのけふ、ふとくちずさびおきたりけるを、思ひ出で丶忍びけるなりけり。かくて、十一日に院にかへりつ。

すべて、あとさきとり集めていへど、馬關より古道具屋のきて、腰うちかけて、煙草くゆらすを、此のころ二人は煙草に久しく飢ゑてありけれど、羨ましきことと限りなく、遂にえ堪へで、それが煙草を乞ひぬるは、八月二日の事にて、松園が女子共をゐてきて、黄瓜くはせたるも、此時なりけり。松園馬關の活版屋にゆかんとて、和尚を垢田の海藏寺にたづねあひて、酒のみけるは、十月十六日なり。この十一日は、和尚の入院式したり、二三日前より、人々集ひきて、よういなど走り騒ぐ。けふは折わろく雨ふりきつれども、をちこちの比丘、比丘尼、すべて集ひぬ。式のさま尊げなれど、非學のものは、何とも知りたらず、只衣、袈裟の、美はしきのみぞ、目には見えける。衆僧の中にて、海藏寺の祖梁といふ和尚は、色黒く、かの水滸傳なる、魯智深のやうにて、讀經の聲おそろしげなり。光明寺の曹源和尚は、こゝの和尚の兄にて、かたち美はしく、才ありげなるさまなり。院の前の住職は、この和尚になんありけるとかや、女共くはしう語りきかせぬ。親しうしける友が、あづまに上るをはなむけせんとて、時をたがへで、夜はより出で丶、馬關にいきけるは、廿二日なり。松園病み臥せる時、友の弟なる人、ものもてきてくれたり、ありがたき志なり。とかくしてまかりなんとして、立ちたれど、裾長やかに引きたるを、いそがはしくかきあげつ丶出でしは、十一月二日のつとめてなり。豐浦の學校の、紀念式見に行きたるに、學生どもあまた集ひきたるを、覺苑寺にて、やう／＼さとしかへしつるは八日なり。廿三日は、新嘗祭なりけり、生徒どもあまた山にのぼらんとてきたり。和尚出で丶物語して聞かせぬ、今日は達磨忌なりけれど、夕ぐれより又人々多く集ひきぬ。十二月三日の夜の、い

たくさえたるに、二人れもてを包みて、豊浦に出で丶、をちこちわりきめぐりたるはてに、きたなき店に入りて、物うちくらひつるなん、いとをこりたるわざなりし。ことし二月十八日は、陰曆の正月元日なりけり、つとめてより雪いたく降りつみて、野も山も埋れぬ、夕ぐれよりくつもはかず、しりうちかゝげて、み雪ふみ分けて、友のがりいきたるこそ、絶えもいりぬべく、いみじかりしか。なほ〳〵思ひ出さむ、をかしき事ども、さはならんを、さばかりはとてもらしつ。

松園、ねぢけたるさがなりけれど、物におくてふ心は、うすかりけれど、いかでと思ひたちぬる事は、いづこまでもと、深く思ひ入るさがにて、吾嬬に上らんの心出できしより、障りありて、しばしてこそとだえたりけれ。此頃院の棟の雪、などりなく消えて、ま垣の梅今を盛りとかをり、人く〳〵てふ鶯の聲も聞ゆなる、長閑き頃となりぬれば、心もひときはうきたちて、今は片時もえしのばずなりぬ。和尚に別れ、わかぬけしきを後に見んも、さすがに思はぬにはあらねど、又程へずて皈りこなんをとて、遂に近々に上るべき事に定めぬ。和尚もえさらぬ事ありて、近きに萩にいくべけれどとて、三月九日の夜、うちつどひて別れのわざしけり。十三日和尚は先づ別れて、山を下りて、萩へ向ひぬ。廿五日はをしへ子ら、あまた別れせにぞ、ひねもす來續けたりける。紀念に何やかやと、出してとらせつ、又よみてとらせつる歌、

春霞たつを見すて丶行くわれを
　　花なき里の雁と見るらん

あくれば廿六日、未明に起き出で丶、山を下る。さすがに名殘をしからぬにわらねど、暫しと、とゞむる人もなし。庭前の海棠はや莟みたりけり、今三日四日をらましかば、咲き出でましを、をしき事よ、この花や、あるじの皈りこん日を、まつにこそと、ひとりごちて出づれば、友の親等送りにきたりけり。これにも別れて、下りける程に、坊も遂に見えずなりぬ。

かくて故郷にかへりいにて、和尚がかへるさに、たちよる事もやとて、したまちけれど、つひに見えざりしこそ、いとほいなかりしか。かくて上らんとする今はに、ある友のがりつかはしける、

はる霞たち出でゝいなむ故郷の
　のどけき人ぞ戀しかるべき

今は三百里をへだてたる、吾嬬の都のかたほとり、早稲田のおく、高田村といふ所になん、住みける。學校の子らが、唱歌うたふを聞きて。昔を思ひ出でゝ、

ふる里のまなびのまどの朝かげに
　子らがうたひし聲の聞えぬ

子らは、何とも思はずやあるらん。又和尚を戀ひ、萬松院の今昔を忍びて、よみてつかはしける歌十首、

(一) 庭のおもにあさるひえ鳥よそに見て
　すぐしゝ時もありし此身を

(二) 冬ごもり筧の水もよわりゆく
　夜半のしづくの音のはかなさ

(三) 朝な〳〵とゞろ〳〵とうちならす
　のりの鼓も今は聞えぬ

(四) 朝な夕な見はるかしけん君が宿の
　向ひの峰は今もたてりや

(五) まどゐせし火をけの灰を今は君
　かきならしつゝ獨すむらん

(六) かしましき隣のおぢがかごとをも
　君ひとりして今はきくらん

(七) 今もかも咲き匂ふらん君が宿の
　池のみぎはのむらさきの花

(八) 春霞かすみていにし雁ならむ
　またれん秋もあらましものを

(九) 雁ならぬ我身はいつの秋にしも
　またれて君にあはんとすらん

(十) たちさりし野澤のおとのにごりなむ
　谷の眞清水むすび入れてよ

和尚も亦、萬松院に一人居て、曇なき眞如の月影を打

ながめて、松園を思ひ出で丶、よみてをくりける歌七首、

（一）月影はこぞにかはらず照せども
　　君と別れて見るぞかなしき

（二）去年めでし月はことしも照せども
　　ことしの月はうらめしきかな

（三）草に出で丶草に入るてふ武藏野の
　　月をぞ君が今ながむらん

（四）心あらぞうつし見せてよなれぎぬの
　　親しき友のその面影を

（五）月かげは昔のまゝに照せども
　　聞きし笛のね今は聞えず

（六）物おもふ我心ねやしりつらん
　　かこちがほなるけふの夜の月

（七）むかし忍ぶ今宵の月に君は今
　　歌うたふらんふみや見るらん

松園、夜になれど、月に向ひて此歌をずんじつゝ、いとゐたくあはれがりて、あかしくらしけりとぞ。

（以下次號）

隨感隨筆（一）

白松園主人

侍る文の事

方丈記、徒然草、の如き記錄文、及び古今、後撰、拾遺、を除きて、其以後に出來し、代々の歌集の序文には、（侍り）、（さぶらふ）、（仰せらるゝ）、などの語多く入れたり、之れを侍る文と稱す。之れ蓋し、中世以後に於ける文章の病なり。元來日本文には、記錄文と會話文との二樣あり、記錄文は心覺えに書き、會話文は自他を問はず、すべて談話を記したるをいふなり。此の二樣は、素より文章の組織を異にせる故に、中古は二樣に用ひたりしを、源平氏より少しく以前なる、白河法皇の院政時代より、頗ぶる亂れて相混雜するに至

り、遂に侍る文の弊を作りぬ。源平時代なる、定家、家隆、二卿等のかきし文は、皆此の侍る文にて、此流を汲む歌學者は、悉く侍る文を用ゐぬ。爾來鎌倉室町を經て、文學の暗黑世界に、稍や光輝を認むるを得たる德川初代の頃は、猶依然として侍る文なりしが、契冲、東滿、眞淵、など漸次偉大なる國學者の輩出して、國文學隆盛を極むるに至り、此の病を一掃したりしかども、猶漢學者間の手になれる者には、之れを誤れるもの多かりき、されど今日に至りては、殆んど此の弊に陷る者は多くなきが如し。

抑も此の侍る文の、記錄文に混入するに至りし由來を稽ふるに、中世の頃、文章を取り扱ふ人は、概して朝廷に仕ふる男女に限りし故に、其の男女共に、皆仕ふる主人あり、されどいづれも已れより以上の人に對するなれど、事每に敬語を用ゐたり、故に家に在るときも、猶奉公の心失せず、日記、紀行、の文を書くにも、思はず識らず、會話文に屬する(侍る)(さぶらふ)などの語の、紛れ入りしならん。現に紫式部日記などには、二三の會話文ありて、何心なく書きたるなれど、ふと日頃の言の入りし者と思はる、之れより以下の人に至りては、もとよりその區別をだに知らずして、すゞろに後世に傳へたる者にて、漢學者等はかゝる事の所以をも知らずて、政事上の事にまでも、侍る文を用ゐるに至れり。之れ先づ、侍る文の沿革と思はるゝなり、之れよりして、俗には之の沿革の如何をど知らで、只一般に國文をさして、侍る文、國文書をして、侍る書といふに至りぬ。

吾人は、實に侍る文家(所謂國文家)を厭ふ者なり。つら〳〵、世の國文家といふものを通觀するに、其の人の氣なく骨なき事、猶その常にひねくる所の侍る文の如く、徒らに當時不通の文字のみを弄ぶことを知りて却て現在通用の文章を得書かず、優柔懦弱の歌文のみを好みて、つとめて婦女子の愛を買はんとする者に似たり。由來、不見識の者のみ多かれど、其の文は、婦

女子の間に用ゐらるゝに過ぎずして、其の範圍極めて狹く、從ひて素行修まらで、教育者官に腐敗の人といへど、常に侍る文家に多し、之れ日頃淫靡の歌をよみ、艶冶なる文を見るに浸染したるにて、其の風采言動、一見して中古時代の人物を聯想せしむる底の者のみ多きは、うたていやらしき事共ならずや。かるが故に、學問としては教育社會に無用視せられ、人物としては物の役にも立たぬ貧乏公卿視せられ、殆んど生氣ある活社會には、伍せられざるかの觀ありて、世人は遂に、之れを目して國文學者の本態と思ひ、國文といへど、女子文學の如くに考へ、曾ま活氣あり精力ある者あれど、之れを怪みて、國文學者に不似合なりといふに至る。嗚呼吾人は、死文をもて金科玉條とせる、國文學者たらん事を欲せず、偏狹懦弱なる、侍る文家たるを好まず、只進取勇邁なる、國學者たらん事を欲す。アゝ侍る文の輩よ、汝等は宜しく、平田篤胤翁の著書を讀みて、暫く其の氣力を養へ、又其の内容の廣きに鑑みよ。

余は、當時の侍る文家を厭ふ事、此の如くなれども、されども侍る文を排却する者には非ず。歴史的文章を去て之れを存し、娛樂的美文として、之れを作らん事を欲す。只かの之れをもて、唯一の糊口學として、實用的文學に暗き人に、習ふことなからんを願ふなり。但し女子は、自ら之れに異るなり。抑も女子は、先天的なる性格に基きて、益々其の美を發輝せんことを力むるなれど、須く文字によりて、其の氣品を高尚にせざる可らず。元と女子の天職は、家政を料理し、兒女を教育するにあれど、高尚幽玄なる學理を研究するの必要なし。本邦古有の品性に鑑み、歴史的文學を味ふに於ては、吾人は殆んど其以外に、文學の必要を認めざるなり、否な寧ろ其の哲理を説き、科學を談ずるを聞くときは、吾人は耳を掩ふて却て、其の本邦婦人の特性を害ふを惡まんとす。是に於てか、侍る文の光輝は、初めて我國婦人社會に燦然たらん事を望まざるを得ず。

東京の花見

年々歳々花相仝じ、櫻花繚乱、滿都皆花ならざるはなく、霞か雲か、はた雪かとぞあやまたれぬるには、垂れこめても得あらで、歳々年々同じからざる身は、まだ老いといふにはあらねど、不用ながらの山櫻の、ふとやかなる杖をひさげて、假りそめの旅の宿りを立ち出で、先づ上野へと物しぬ。梢は白雲の如く、群れ來る男女は黑雲よりも夥し。「咲いた櫻になぜ駒繫ぐ、駒が勇めば花が散る」、櫻樹に馬つなげるは、優しと見ゆれど、彼のしどけなき男女の、酒を被りて胸もあらはに赤裳の裾を蹶ひらきて、おひつ、おはれつ、花のあはひを狂ひまはれるには一驚を喫しぬ。げに淺ましき人の樣かな、都の習はすべてかゝるらん、花見んとする人はあらで、只人に醉ひ、人を醉はするのみなり。風さと吹き來て、紅塵萬丈、結ひたての島田髷は、ちりに油のにほひも失せ、折角仕立てし羽織の色は褪れども、平然として練り歩き給ふ新造令孃の、心のうちこそうたてけれ。彼等がけふの花見は、如何なる花を見んとすらん、若しその思想を解剖して、照魔鏡に反影せしめむ、いかにめざましき見物ならん。嗚呼上野の花、あはれ汝を見んとする人は、不幸にして一人もある事なし、余輩は寧ろかゝる花を見んよりは、下宿屋の二階にころびて、理想の花を見る事の、遙かに優にして樂しきを覺ゆ。溪流鏡の如く、川沿柳うちけぶりて、松柏緑りこまやかなる處々に、山櫻のさきこぼれたらん方の、高潔にして、しかも美はしきを思へど、只管望鄕の感に堪へず。嗚呼滿都の士女よ、心あらん者は上野隅田に行かんよりは、去て江戸川の花を見よ、木橋の欄杆、人稀にして砂起らず、却て清光ある事、彼れの如く凡俗ならず、さらでも兼好の云へるあり「花は盛りに、月は隈なきをのみ見る物かは。雨にむかひて月を戀ひ、たれこめて春の行へしらぬも、なほあはれに情ふかし」と彼れが志操の高さ、尤も羨むべし。

（つゞく）

大和はなし（一）

蓬生屋女史

支那の國の人はじめは人身牛首、蛇身人首など、人にや、牛にや、分たざりし、之れ禽獸の化して人となりけるにや、故に後の世にも、或はけ物の如くかみあひ、國を奪ひ、君王を殺しあふいと凄じ、西洋にては、ユーフレテースの近傍において、男女二人はじめ化成したりと云ふ、之は樹の股より生ひしにや、岩より生れしにや、云はゞ朽木の中よりうぢ虫の生せし如きものならむ。ひとり日の本は神御子の天下りたるよし、されば國がらもいみじううつくしく、人心も何となう、尊きふし多く、實にとつ國にまさりたるふし多



きぞめでたき。いまそのめでたき事またをかしき事等を語りつぐになん。むかし舒明天皇、御位につかせ給ひて、二十三年、兵をむけて新羅をうち給へり。其の折り、伊企灘と云ふもの、その兵の長なりけるが、口惜しくも新羅に虜られたり。新羅之を服さしめむとすれど、伊企灘勇烈の者にて虜られながら、中々新羅の將に服さず、新羅の將さまざまのことを以て服さしめんとすれど、伊企灘はきたへにきたへし金鐵の心、屈撓する色さらになし、新羅の將、服さずば斬らんとて、已に刀をぬきはなち、逼て褌を脱がし、尻臀を汝が日本に向けて、日本の將我が尻を喰へと大きなる聲に號呼せよ、しからば、汝を助けて得させんと云ふに、伊企儺新羅の宮の方へ尻をつきむけて、新羅の王我が尻を喰へと大に呼びさけびぬ。こや汝は命のをしきを知らずや、日本など何の頂くべき國ぞよくよく考へて、今聞かせしやう、日本に尻をむけて申せ、さあらば、宥るさん、さらずば用捨はせぬ、此の刃にてかく斬るぞに白刃の背をひたと背にうちつくれど、伊企儺は少しもひるまず、又や新羅の王我が尻かすをしやぶれと大にさけびたり、新羅の將なほ之を責むる幾回に及べど、伊企儺はなほ新羅の王わが尻をしやぶれとて、尻臀をたゝき、幾度責むるもなほ、先きの如く號呼せしに新羅の將大に怒り、遂に刀をふりあげて、之を殺したりとぞ。王をはじめ、ありとある人々皆之をしみにたり。

むかしばなし

三浦千春

今はむかし、なにがし寺なる住職の和尚、常に白酒てふさけを好みて、かもしつゝひめおかれけるを、年わかき弟子ほうしの見つけて、このもしく思ひけれど、和尚のひがひがしう、ものをしみせらるゝにはゞかりて、さる氣しきもほのめかさで、念じ居りけるが、或時ものへまかりて歸り來つゝ和尚やいます、たゞ今歸りてさふらふと、たかやかに申しのぞへけれど、何のいら

へもなくて、さらに和尚の見えされば、こはよきひまこそ得たりつれと打ゑみつゝ、ひそかにかのひめおかれたる酒がめの口を開きて、その酒を茶わんにくみうつし、やがてそこにてとうべんとせしが、さすがに和尚の、今にも歸りきて見つけられなば、いかばかりからき目見なんと、けおそろしう思ひけるまゝに、いかであらはならぬ所に、かくろへて物せばやと、おもひたばかりつゝ、かの酒あふるゝばかりたゝへたる茶わんをたづさへ、おくまりたる方のかはやにいたり、戸口に手をかけ、つと引あけたれば、こはいかに思ひもよらず、このかくれがには、はやく和尚の忍びゐて、同じくたゞへし茶わんをもち、舌うちしつゝあられけるにぞ、弟子ぼうしは、たゞきえにきえもいりたきこゝちして、汗あゆるばかりむねつぶれたれど、さすがにこざかしく、心たくみあるものなれば、とみに思ひのどめて、さりげなき面もちつくりつゝ、やをら戸ぐちについゐて、からべをたれ、おのがもたる茶わんを、和尚の前に、いとうやうやしうさゝげ出しつゝ、今一献かさねたまへとぞすゝめける。

留守言

田端の留守居

うぬぼれ鏡

世にうぬぼれ鏡といふあり。此の鏡に向ふ折は、きめ荒らき顔もこまかに見え、色黒き面も白く見え、従つて七難はかくれて見えず、人、之を信として、いとうつくしき己が容貌とうぬぼるゝ故に、うぬぼれ鏡とは云ふならん。人にも、又、此の鏡の如きあり。をや、何子さんはいとうようできました。貴孃はお行儀もよろしい、御兩親にも孝行でなど、金の光りにや、位階の高きにや、さはなきものを、己れ師にありながら、言葉卑く、貴びかしづく師をはじめ、坊様はかしこき御子よ、孃様はおとなしく入らせらるゝなど、わけなくほめ仕ふる婢僕、又、萬づにつけ、ほめそやし、へ

つらふ友、人、みな己ばれ鏡とや云はまし。何となれば、大人にても子にて誠に其言を甘んじ、己れを貴きものとし、かしこき者と思ひ、耳によろこび、心によろこび、己ばれて世にほこり、人にほこり、己のあしき所は少しも知らず、これうぬばれ鏡に向ひて、己を美人と見なしたるに異ならず、さらぬだに、人、うぬぼれのなきものはあらじ、而して己れをうつくしく見するものを誠のよき鏡となし、信を見する鏡をあしき鏡として捨つるが多し。されば、おのづから、鏡をつくる人、信を捨てゝ、僞りの鏡をつくりて、人をしてよろこばせ買はしむ。諂言また耳をよろこばせ、諫言は耳にさかふ人情、己をほめ、へつらふものはいたくよろこび、かれは善き友なり。信功の人なりとてよろこび交はり、己の非をいさめ、誠むるものは、人の短處をさがし罵る、あれはあしき人なり、不信極まるものなりとて、捨て交はらず、亦口惜しき事ならずや。あはれ、誠に容色を飾らんと思ふものは、己ばれ鏡に對せず、中々に捨てたる鏡にてらし、よく見て、油をこらし、白粉をぬり、紅粉をおぎなひよそほふべし。うぬぼれ鏡決して用ゆべからず、之に對すれば七難見えざれば、はや美くしき者とうぬぼれて、そらねばならぬもくげもそらでやみ、よくこするべき白粉も十分としてやむ。誠の賢人貴人とならんと欲する人は、諫言又用ゐて、日に己を三省し、賢より賢にうつるべし。むかし堀左衛門督が、過失廿條を數へ、之を城下に榜したるものありたり。監察、之をとりて、以て左衛門督に呈して曰く、よろしく其人を審覧し、以て典刑を正せと、左衛門督、之をよみ畢るや乃ち、口をそゝぎ、禮服をつけ、拜して曰く、之、天、我に規する也とて、之を櫃にをさめ、以て二つなき寶とし、大に仁政をほどこしたり。國人之を感載し、稱して名人左衛門督と云ひきとぞ。あはれかしこき人は、盜賊の言必ず甘んぜずして諫言を用ゆるかくの如くにすべし。

家庭の花

後篇（承前）

小倉山人

結婚の後さばしは霞村、久しく霜枯の林に住みし鳥の、今陽春の候に逢ひて花の山に入りしが如く悦びしが、やがては又瓦斯の脱けたる風船のやうに萎縮んで元氣なし。お千代はこれに氣を揉んで、その原因を尋ぬれば、世の中の心配は孰れ金この心ぼそき返辭。さりとて毎日筆も執られず、空しく齢いでおくらるるは如何にも口惜き御了簡こゝに、幾干の金といふ物あらば、何日も生々として職業には勵み得給ふぞや、それ聞せ給へといへど、霞村は思案の腕を解き、切めてはこゝに五十圓の金あらば、毎日苦しむ買掛、幾月か滯れる家賃も濟まし、快き氣持に成りて、筆も執られんと年來の願ひなれど、何分にもその日〳〵の生活におはれて、おもふ程の物も書けねば纒つた金も取れず、かくては霞村何時世の中には出られうぞ、その爲其許にも日々の辛配苦勞、さこそは辛き事なるべし、アヽ情ない〳〵と萎れかへる。

お千代始終を胸に味はひ、この爲の御辛配とはお氣の毒なり、これとても大金ならば女の細腕には蝸牛の東海道、それも汽車あるこの頃では何んの、それ程六ケしいことでもござりませぬに、それならばその樣に何故仰しやつては下さらぬ、結句うらめしい御遠慮は女房の身に水臭きお仕打、憚りながら其位にて御內證の陽氣に成らば、わたしの簞笥の抽斗二ッ空にしても事は容易に濟み申すべく又、叔父の紙屋も利益の薄い商買こそ致して居りまするなれど情は至極厚い男、これ〳〵と打明けたらば百圓でも苦しからずと申すは私、相談して見ぬ中から宜し〳〵持つて行けといふ聲が聞えまする、いづれに致しましやうぞ、兎にも角にも一旦那へ參り、叔父が詞に從ひましやう、それではつひ一走、阿母さま鳥渡里まで、直に戻つて參りまする、御用心あそばせや、お茶はこれへお菓子はこれへ、お

ころび遊むすな、良人お氣をお附け下され、母さまは近頃何うやられ足取、お危うて成りませぬとの詞も、義理や世辭にていふにはあらず、これ眞實の親として倦まず撓まず親切に仕ふることも日數積れど、人の眞情はあらそはれず、流石に邪險の一天張なりし老母も、いつしかと嫁が情のぞく〳〵と嬉しく成り、我れからつとめて折るともなしに、むごう是れまでの邪險の角ポッキりと折れて出て、嫁女やお千代と懷かしがれどお千代いよ〳〵丹精を凝し、母さま〳〵と劬りて、幾日經ても暇さへあれど、老母が側につき草のうつろふことなく、實に實、孝に孝を重ねるに、老母は又剛情な氣質はどあつて、極端より極端に一走お千代がこゝに嫁せしより滿二月と經たぬ中、あッぱれ優しき姑御に成りて、朝夕ニコ〳〵笑める口元、齒のない所が罪なくて可愛し。人の心は烏渡の加減で火の前の飴のやうに、何うでも形の變る者なり。さてこの日も老母は嫁の里へと行きしより、一時が一日の樣にも思はれて、アヽ手間の取れること、最う戻つて來さうなもの、未だに戻つて見えぬのは、何か途中で間違ひでもありはせぬか、アヽ氣が揉める歸途は孰れ車であらうに、さても〳〵遲いこと、お前つひ一走、其處まで行つて見て來ぬか。はい〳〵と親には一句も逆はぬ霞村、口には返辭爲ながらも是は迷惑、さて何んとしやう、急いで戻れお千代やアい、女房いのうの一念、糸と成りてその足を手繰つたやう、おもひ立つては老の一徹、待ても暫時もあら礒の汐から聲、あれ未だ行かぬか行けといふに、さりとは思ひやりの無い子ではあるわい。嫁女さへ戻つて來れど、其許は家に居ずとも宜いに、エヽ何を愚圖〳〵して居るぞ、とこれは又短兵急に急立てられて、はい〳〵只今參りまする、と我家の門を出會頭にヲヽ良人、何方へお出でなさいます、と小股に路次より入來るお千代っいかにお心よしの霞村でもお前を迎ひにと云ふは心が咎めたか、少し其處邊をぶらつからうかと思つたが、其許が戻つて來たならど吾儕

も行くまい、母さまのお待ちかね、サアく早うと後に尾いて、嬉しさうに引返す霞村先生、お顔も大分春めいて見え給ふ。

母さま只今。ヲヽ嫁女戻つてか、お里は皆さまお異狀もないか。叔父からも叔母からも分けて母さまへ宜しくとのこと、これはお粗末なる品ながら母さまへとて叔母よりの、これは私のと取出す品々、老母は機嫌いや增して、毎度のこと御親切に贈り下さる品々、何んとお禮を申して宜いやら、疲れたでわいのう表は嘸や寒かつたであらう、風でも引きは爲なんだかえ、サアサア是でと脚爐を向ふへ向ける親切、變れば變る心かな、これもお千代が孝行からと、霞村は切りに感心して、おもはず見かへる老母の顏、善くこそ折つて下された額の角、お千代牛肉を買ふて來たか、母さまには何よりの好物ぞ、今日は寒さが身に染みる、早くと云へば尻輕く立つて火鉢につぐ炭の、燃え立つばかりの夫おもひ、叔父の所へ參りまして、斯樣〳〵の今の內證、好い智慧お貸し下されと云ふを叔父叔母皆まで聞かず、早く歸つて御安心爲せ申せ、霞村樣は兎もあれ其式の事に、其許までが叔父叔母に今日までの遠慮立ては何んのこと、水臭いぞと却つて叱られ、これこの通り快く五十圓と言ひ出したを倍にして、その場で出してくれました。今朝ほどのお話に依れば、これで大方それも濟むべく、後々の內證は是れから千代にお任せ下され、良人はそれより大切な御事業にと今日こそ始めて折を得て切出す心中、貞といふ字も必竟こゝぞ、戀こゝぞ、霞村はこれに感激して、時節到來、開きぬ我運、この時この機逸す可からず、こゝぞ年來苦中に研きし我腕の驗し所、嬉しや母さま、待てや女房、今こそ此家に斯うしてわれ、雲雨を得ては蛟龍地中の者にあらず、この苦みさへ免るれば桐生霞村は千人力、いで明日よりは齋戒沐浴、一考專念筆を揮つてわが名を成すは彼の圖案、彼の圖案、フウ仕てやッたりと拳に火鉢の椽を叩けば土瓶は躍つて灰神樂、神の手引か去りと

は吉兆、表に聲あり霞村は居るか。これは先生好くこそと迎ふる霞村續くお千代を二人列べて、恩師霞峰先生は如何なる事をか語られけん、霞村は老母を妻に托して都門を去ること三月の後、祖仙なんどは寄つても附けぬ千匹猿の圖を一枚見事に書き得て歸りしが、即日恩師の許に送りて死せるが如く眠ること三日目の朝、恩師の君の笑み溢れて高弟霞村に數百金を渡さることありしが、やがて其名は滿都の新聞雜誌に見はれ、續いて來客の足繁く成りしが、今日にてはその名益々世上に聞えて、一家はこれにいよ／＼和合し、何時の間にやら移轉せし邸宅の門構嚴しく、食に魚あり出るにも手車、玄關には書生のごろ／＼轉るもありて、徃時の霞村には似た所もなし。

一時は谷中に世を泣きて一舛米をも買ひかねし貧畵工の引繰返つて今日の長者生活、是もお千代が力ぞと老母は泣いて悦べり。あはれ女の手本ならずや。僕も欲しい彼様なのがと同門の雨村は昨年我れに語りぬ。（終）

張合（その二）

白魚女史

これはれそれ入つた、感服つかまつッた。しか云ふ御身は、幾つぞ、何もの丶娘にや、母さんは和泉にてもあるかと一人問ひ出れど、默然たる二人の紳士もその答へを待つ如く、ひとしく文代が顔をうち守りたり、文代ははづかしきにや、腹だ丶しきにや、うつぶせしま丶紳士が顔を仰ぎ見もせず、よきはさやうのけしからぬ母さまではなきはと云ひながら俄にこと／＼と門の内にかけこみたり。

紳士は思はず顔を見合はし丶が、天晴れめづらしき娘、此處等の景色よりはまためづらしいと、つく／＼感歎するは三十五六の紳士中に尤も年重に見ゆる四十に近き紳士はじめよりあまりにものも云はざりしが、之や感歎尤も深かりけむ、二人が其ま丶過ぎんとするを定世になりはてんもはづかし、此の門に入りたれど、此

の家の子ならん、のうと共に遊びをりし童子に問ふに、しかなりとうなづき答へぬ。此のは入れの櫻須磨にはまれなるに、卯の花の袖垣も何となうみやびに床しう、さらでも、主人の心のくまるゝを、けしからぬ母にはあらじとつぐる彼の子の母をもとはまほし。君等は如何に思ふとあるに、げによ、白川君の感歎は又めづらしい、何れ和泉か、紫か、今式部にもたぐへんものならめ、此處ら須磨のまさごの數にかぞへれかんもすまぬ心地する、いざもろともに、辭んと、履ふみかへして門に入れど、かきつぞたのまだ葉は短かけれど、根はいと深う、やがてはむらさきに匂はん色も見えてとくなつかしげなるに、彼方には呉竹のふしおもしろく鶯の啼く音ひとく／＼と告ぐるに似たり。

主人黒川勝はかけこみし文代を見るより、文か、もう歸りれつたか、さるにても此頃は、俄かに外遊びがきらひになりをつたな。そして勉强が大層すきになりおつた、何でも勉强して、えらく成つて、父が遺恨をはらしてくれとて、頭をさすりしが、うき雲の迷ひきてか、俄かに眼をふたぎ、長歎息、アー汝が男の子ならんにはとて殘念げに又眼を開きて文代を守りたり。文代は、父が、何の心のありてさは云ふや知らねど、我が頭をさすりつゝ、男の子ならんにはと歎息せらるゝこと幾回なるを知らず、子供ながら其の度毎に身の幅の狹き心地して、父が不足を又わが不足としたれど、父が此の聲をきく度に、何となく幼な心に染みて悲しく、今日は涙さへほろ／＼とこぼしぬ。女子なるを恨まで、天にも地にも、愛らしく、悲しくれもふは、だゞ此の子あるのみ、げに可愛く／＼、目に入れにも、口に入れんにもなほうづこき心地せらるゝ娘が、涙みては、惻愛の心までいよ／＼加はりて、え堪へず悲しく、十歳になる子を、なほ乳子のごとく抱きしめ、／＼てもなほえ堪へず、え堪へず身をもだへぬ。親愛の涙に、くつの音も、人のかげも、父子には見えず聞えず。三人ははや椽に來りてあはれ小式部は君が



御子にや、己たちは都のもの、さらでも此の里に、此の花のめづらしく、御主人が心もくまれて床しうおぼえけるに、そこの御女のかしこさ、いよ〳〵父母のみことのなつかしう、斯うはれどろかし申しぬとある聲に、勝は實におどろきぬ。文代またおどろきたり。問ふも問はぬも春はたゞ花にまかし申して、半座分ちまゐらせんも、やすき事ながら、花は門にのみ、内は中々に色も香りもなくて口惜しうや候はんと無骨に答へたり。思ひしりよは人品ひけ高かりけるに、三人は慇懃に挨拶して、否いたみ入り候、花のみならむ、たゞ過ぎがてに見るべかりしを、實に御主人に遭はまほしうて、かくはづか〳〵入り候ひぬと云ふは三人の中の年重の紳士なり。

主人はたゞをかしき浦人、とにも、かくにも問はせ給ふとならむ、むさけれど、此方へ、文代よ、彼處のむしろをとりてこよと云ひつけつゝ、己も起つて、煙草盆持ち出づるは、流石にまれ人をもてなす心にや、文代は父が云ひつけのまゝ、席をとり來り、これも流石に塵を拂ひて、椽に敷き、かうでよきやと云ひげに、父を顧るもあだなし。一事に感服せし紳士は萬事感服げに、やう〳〵火と煙草とを持ち出でたる主人に向ひ、其處の御子のかしこさ、此の席のしきやう、日來御家庭の正しさくまれて返す〳〵感服つかまつりぬとあるに、何を、をかしや、彼ははやく慈母に分かれ候て、片親の不憫わなりに、我ながら姑息に流れ候て、一向にはか〴〵しからず、もとより禮儀しらぬ田舍ものゝ中にも殊に私は作法ぶりしことはうるさく、日來作法も何も教へず候を、其の席の敷方の御意に叶へるも、たゞ僥倖のみとむかりにうち笑へむ年重の紳士はそのかしてぶらぬ言葉のいよ〳〵床しう覺えて、かくしよう、己が名刺をとり出し、われは、白川元雄と申す者、以後は別懇をと聞くや勝は大におどろき、白川元雄、元雄とくりかへしつゝ、名札の裏表を守り居るに、元雄もいぶかしながら、はい、白川元雄、御主人には、何

ぞ御不審のおはすにやと問はれて、勝は我にもあらず、おどろきし事に心付き、急に形をあらため、何げなきさまにつくろひ、否、どうやら伺ひしやうの御姓名と思ひしが、さなり〳〵、此の間よみし書物著作者と同じ御氏に候ひしものから、ふと心にうかびて、考へ候のみ、私は、黒川勝と申す者にて、御覽の通りの、草の屋の主人わけて、問はるゝもはづかしきばかりに候。こや文代、そこの瓢に酒買うてきてたもれ、酒をかふとのれ世話はいらぬと仰せられんや知らねど、之は我がためのみ、酒と彼の子故に私は世にながらふのみ、こや、文、錢は此處にあるぞと傍らの机の引出より二十錢銀貨を投げ出して、莞爾とうち笑ひ、かやうに田舍人は下司の事をのみ教へ候をかしさを肴に、文代早う行きて來てたもれと顧るうしろに、文代は早く瓢をおろし、錢を取りて裏へ出で行くに、これはおそれ入り候、さらぞ、私、求め來らん、あのやうのあどなき御子にと云はせもあへず、あどなくは育ぐくめど、糟糠の妻になくなられて後は、兎角おのやうの業をとらせ候、何、ぢき近き所にて習ひをり候へどおぼつかなき事も候はずなど云ひつゝ、澤庵自からきりて用意の折から、文代はやくも瓢を下げて歸り來りぬ。文代さんとやら誠に恐れ入りましたと皆々に慇懃にあいさつされて、文代は返さん言葉を知らず、たゞにこ〳〵と笑ひ答ふるも愛らし、一瓢の酒を四人微醉にも至らずして、はやく瓢は空しきよとなりふとの袂風にまろびんとするを、己、まだまろぶは早し、此度は阿孃を煩はさじとて、客人の一人なは酒はしうてや瓢を起して走り出すもをかし。飲みはすまゝに、まろぶ瓢を見て、白川元雄は不審の眉をひそめしが、流石心よげにへうや〳〵と東湖が詩を吟ずる主人が顏をまぞたきもせずうち守りたり。





春のゆふへ山里をとふ　東久世通禧

くれにけり花よりはなに尋ねきて
　歸るさとほきはるのやまさと

のどかなる日濱べにいづ　高崎正風

面白きこゝろのはてもみえぬかな
　かすみをあさる濱のとほあさ

霞中雲雀　松浦詮

かぎりくな霞める野邊の夕ひばり
　おつる芝生にまどひてやなく

海邊霞　竹屋光昭

うちよする浪の音さへしづまりて
　磯べのどかにたつかすみかな

行路鶯　諏訪忠元

かへり路の梅のした道たどりゆく
　袖ひきがほにうぐひすのなく

夕春雨　宮地嚴夫

かはづなく聲も聞えてかきつ田に
　夕しづけくはるさめのふる

朝鶯　小出粲

長閑なるけふのひと日のあらましも
　にほふあしたのうぐひすの聲

早春柳　鎌田正夫

かものゐる山田のれもは氷れども
　なはてのやなぎ春めきにけり

河蛙　大口鯛二

みなそこの蛙もこゑをたてつなり
　花ちりうかぶ春のやまがは

石川丈山　千葉胤明

からうたの高きしらべは富士のねと
　共に世にこそあふがれにけれ

張良　遠山英一

履とりてわだのはらをも立ざるは
なみに越たるこゝろなりけり

風琴製造家山葉寅楠ぬしが樂器及商工業を視察せむとて歐米巡遊の途に登りけるをり　岡部譲

比類なきにしきれるかにから糸の
すぐれしかぎり集めてを來よ

織田公　大畑弘國

あれまさるあけたくばたを鋤返し
みつぎを運ぶ御代となしけん

山春月　三浦千春

さく花にわかれてかへるみ山ぢを
うれしくれくるはるのよの月

杜若　三輪義方

かきつばた一群さけり底をあさみ
おとたえ〳〵の水のながれに

青　赤松景福

おのが身を摘ても思へ世のひとの
うゑて青菜のいろやあらむと

別格官幣社菊地神社宮司從五位菊地忠君今年の一月七十歳の齡にのぼりたるをもて御紋付御杯及御酒魚料を賜り祝宴をひらかれける席につらなりて　佐々豐水

たまはりし白たまうきの酒のみて
よはひいく千代重ねますらん

天皇のたまひし眞魚はいにしへに
まれなるよはひ生くおりなり

海上霞　島宮太郎

こぎいそぐ船よりみればいそ山も
みな海にしてたつかすみかな

東風暖入簾　草野隆道

梅が香をけさもさそひて玉だれの
すきまもりくるはる風ぞふく

對花思昔　伊東祐賢

心にもかけぬむかしのことまでも
うつらふ花におもひいでつゝ

國旗　宇井正夫

かしこかる豊あし原の日の御はた
かげになびかぬ國なかるらん

楠公　安齋篤敬

たらちねのにはのをしへに撫子の
花もにはへりさくらゐのさと

曙鶯　木庭芳香

あけぼのに眠れる花をよびさまし
こゝろありげにうぐひすのなく

母のおもひにこもりけるとき　亀谷行

いますかと思へど見えず見えぬかと
思へどいますこゝちこそすれ

春日長　伊藤純三

青柳のいともゝちたびくりかへし
ながき日あかぬ歌のまき〳〵

遲日　足立正枝

いとも日は永くなりけり咲く花に
ゆふべをしらぬこゝろのみかは

花間鶯　鈴木八束

咲き匂ふ花をかりかはうぐひすの
なくねもたかき木陰なるかな

花見ありきて　近衞貞子

世の業のしげき人にはわらはれん
はなより花にうかれありきて

望遠帆　蜂須賀隨子

久方のくもゐにつゞくうなぞらの
かぎりを見せてゆく帆かげ哉

花のころ故郷の友に　西四辻茂子

住すてし我ふるさとのはなのころ
むかしのともぞ戀しかりける

引田部赤猪子　南郷柳子

めさはやの御言畏み八十とせも
　經にけんまつの操をぞおもふ

糸櫻　北島以登子

春かせもさはらぬ枝にさきしこの
　はなのさかはり久しかるらん

垣若草　保科節子

つくろはぬ垣ねも春はなつかしき
　小くさの色になりにけるかな

故郷山吹　松平健子

蛙のみすみのこりたるふるさとの
　いたゐに匂ふやまぶきのはな

海邊春雨　原田蒼生子

さらでだにぬれし袂を汐干がり
　歸るふなぢにはるさめのふる

故郷春雨　大谷章子

あれはてゝ人もとひこぬふる里の
　軒のしのぶにはるさめぞふる

里春月　鶴久子

つゝみゆく花見ぐるまの音たえて
　月夜しづけきてらしまのさと

遠村柳　土岐幾子

青柳のめもはるかせになびきつゝ
　みどりにけぶるとほのひと村

雲雀　海上壽子

かの岡の花の香さそふはるかせを
　つばさにしめて雲雀なくなり

山中花　安東菊子

世の中の塵をはなれてやまざくら
　こゝろ高くもさきにほふかな

暮春雨　足立三尾子

くれてゆく春の名殘と見ゆるかな
　のどかにおつる軒のたまみづ

清水靜子

大磯へまかるとき上野山の櫻咲きそめしを見て

歸りくる時をまたでや散りぬらん
　さかりの花をゆめにこそ見れ

老松　森川眞鶴子

いく年もかはらぬ色のふかみどり
　まつのみさをの高くもあるかな

春日　安齋さく子

あすか山なかき春日をけふもまた
　花のこかげにくらしけるかな



雜報

●神武天皇降誕大祭典　は、既報の如く、本月五日より三日間、日向の宮崎宮に於て執行せられたり、式典は、宮司井上榮雄、大祭會總理二條基弘公、會長島津忠亮伯、副會長森尾茂助、其他の祭官各之を司り。參拜の官民は、内務大臣代理中山書記官、谷子爵、秋月種樹、田中芳男、押川大分縣知事、其他數百餘名にして、五日には、小松若宮殿下、海軍大尉の御資格を以て參拜あらせられたりと。

●觀櫻會　去る十三日は兼て仰せ出されし如く、濱離宮に於て觀櫻會の御催しあり。各親王、王、同妃殿下を始め、各大臣、各國公使、同夫人及内外の諸員は、午後二時過より參苑し、天皇皇后兩陛下は、同二時三十分御出門、濱離宮御苑に臨ませれら、櫻花御覽の後、假立食所に着御、同所に於て、各國公使及各大臣、同夫人等の謁見了りて、各員一同に立食を賜ひ、同四時四十分還御遊ぜされ、尋で各員退散せり。

●宮中御歌會　本月五日御兼題詠進は左の如し。

觀櫻會

美はしき大みけしきな花影にあふくかほさへゑみ榮えたる　正風
御園生の花もてあそふうたけには異國人もましはりにけり　延通
殘なくみその丶櫻さきにけりけふのみうたけ嬉しかるらん　直大
内外のへたてもわかすみそのふの櫻かさしてあそふけふ哉　千秋
さつ國の人もましりて大にはの花のこかけにあそふけふ哉　利嗣
み園生のうち許されて入る人も花もゑみてやまち迎ふらん　豈顯
み園生の花のこかけにうち集ふけふのうたけに遊そ嬉しき　承昭

たけしばのはまのはる風のどかなるみよの惠に花をみる哉　詮
玉楯のうちとのおみのへだてなく花のこかけにつどふ春哉　光擧
み惠をあふくも高しこのもとにけふ九重の花をかざして　通善
玉敷のみそのにほふさくら花けふ宮人のつどひてそみる　長說
櫻さくみ園にけふはまとゐして花をみるこそ樂しかりけれ　量衡
大君の惠もひろきみそのふのちとせのはるの花をみる哉　光昭
ものゝねの花のこ影にきこゆなり宮人今やみきたまふらん　利晃
九重のくもゐの庭の花さかりあふくまとゐそ長閑かりける　忠敏
大君はもゝのつかさらめしつどへ花の盛をみそなはすらん　美裕
さき匂ふ雲井の庭のさくら花まとゐしてみるけふの樂しさ　長延
司人雲井のにはの花かけにめされてつどふはるそゆたけき　雅之
み惠の廣きみそのゝ花かけにめされてつどふくもの上人　量弘
春霞へだてぬみよととつ國のひともみそゝの花をみるらん　任子
外國の臣をもめして賑はしくみそのゝ花をみそなはすらん　文子
はまとのゝ花のうたけのいでましを外國人も仰きてやまつ　詳子
御心の廣きみそのゝ花かけにうちとのひとのつどふはる哉　巨子
よに廣く今そ匂へる九重のかすみのおくにさきしさくらも　敦子
春毎にけふをまちねて外國の人もみそのゝはなをみるらん　絲子
畏くもおほみうたけにつらなりて外國人もはなやみるらん　好子
物のねも遙にきこゆこゝのへの花のみうたけ今はしむらん　鈕子
故郷に花のにしきをかざるらんとつ國人もけふはめされて　いさ雄
外國のひともましりてみそのふの花のみ遊ひ賑はひにけり　三枝
君かよはとつ國ひとも許されてひろきみそのゝ花をみる哉　愛
内外人打集へてもみそなはすさくらはけふの爲にこそさけ　殿夫
いつのよに我もめされて濱殿の花みる身とはならんとすらん　正臣
九重のくもゐのにはの花席しくものもなきうたけなりけり　秋香
さく花も嬉しかるらんへだてなき内外の人のけふの圓居は　有經
司人けふはうれしとうたふらんみそのゝ花の色にいでつゝ　殿雄
櫻さくみかきのうちと諸人のゑみもさかりのけふの圓居か　檀郁
宮人か袖をつられてみそのふの花の盛りをめづるけふかな　長言
おほけなくみはしのもとに集ひつゝ花みて暮す春そ樂しき　有義
司人そでをつられてもゝしきの大内山のはなをみるかな　行久
宮人もこゝに集ひてみそのふの花のうたけに日を暮すらん　照子
さく花も色かつくしてけふのこの大み宴やまちわたりけん　綱二
ことのはの通はぬ國のたみ草もみそのゝ花にましるみよ哉　胤明
濱殿の花のうたけによものうみ靜なるよもみねわたるかな　英一
年毎にめさるゝ人の數そそふ君かちとせのはるの花かけ　義淸

●小松宮　彰仁親王殿下には、客年十月より御病氣にて、興津に御保養遊ばされ、兩陛下並に皇太子殿下より、時々御見舞を賜はりしが、近頃餘程御快方に渉らせられしを以て、殿下は、御慰みかた〴〵、親ら饅頭を御製造遊ばされ、兩陛下並に皇太子殿下に奉られし由、其形は小判形にして、一は興津より富士山を望む圖、一は壽の字、一は樂の字、何れも殿下の御染筆を烙印にして押捺せられ、其味は久しきを經るも變ることなしとぞ。

●神宮御造營の御木曳　伊勢神宮御造營用材の中、御棟木二本は、木曾山より伐採して、此程山田町に着したるよしなるが、同所宇治橋際より神苑を經て神宮

域内に到る間は、有志者總勢千七百餘人にて、去る十一日、道歌おもしろく歌ひはやして御木曳をなしたり。其道歌といふ一節は、

湊濱邊に拾ふもうれし『ミヨモユタカニエ人のうき世を『イサムデわすれ貝』ソレトモニシラガノハヘルマデサッサヒケ〳〵ヒケーヤーヒケ

●孝子　群馬縣に齋藤谷五郎といふあり、夙に孝を以て聞ゆ。家元賤しからざりしが、その十二歳になれる折、家道頓に衰へていと貧しくなりしかぞ、谷五郎鹹魚の行商をなし、僅に一家の生計を保つをえたり。然るに、其後亦幾くもなくして、父母共に病に罹り、殆んど癈疾に陷れり。谷五郎これを痛く歎き、それより一層心を勵まして勉め働き、只孝養の足らざらんことを恐れて晝夜心を安んせず、今日に至るまで其間二十年、實に一日の如し。人の偶々妻を娶らんことを勸むるものあれぞ、奉養の薄らかんことを慮りて之を辭せり。縣知事其孝を賞して此の程金五圓を賜ふといふ。

●婦德　夫の死後克く其節を守りて婦德を完うするものは、蓋賢女にあらざれぞ能はざるなり。北海道永山村屯田曹長水野英太郎の妻しき女は、其の夫死して後、小學校の裁縫敎師に雇はれ、獨力にて家政を整理し、二人の子あるを小學校に通はせて薫陶最も心を盡し、又赤貧なる者を見ては、已の食を節して之を救恤す、道廳長官其婦德を稱して木杯を賜ふ。

●憐なる孝女　小石川區音羽町に住める增田芳太郎といふは、今より六年以前妻に死別れ、家素貧しき上に多病にて家業も心の儘に勉むること能はず、子は四人まであるに、今は生計に差支へて、已むことなく、長女いちとて二十五歳になれるを茨城縣の或る料理店の酌婦に遣はし、其後次女とら(二十)も奉公に出だし、家に殘れるは、三女みつ(十七)と其弟金太郎(九)の二人なるが、芳太郎は病愈募りて足腰も立たずなり、三度の食事さへ今は缺ぐることあり。然るに三女みつ心懸よき子にて、病父に事ふること優しく、且普通の家の

女子ならんには、慈母の温き惠の下に生ひ育ちて、只をかしくもおもしろくも過ごされ年頃なるに、みよは世の斯る子女を見てうらやみもせず、如何にもして父を休め奉らんとて、身には襤褸を纏ひ、日々人の車の跡押をなして僅ばかりの賃金を得、辛くも一家三人の糊口を凌ぎて、父を慰め、弟をいたはり、いかに寒き冬の日も、如何に暑き夏のまさかりも一日の休みなく、こゝに二年間嘗て變ることなしと。近隣のものども皆之をほめそやし、遂に此の程小石川警察署の聞く處となりて、其趣を上申したりといへど、遠からず恩賞のさたあるべきなり。あはれ、いたはしき孝女にこそ。

●勇婦　兵庫縣朝來郡山口村林田某の妻みよ畑に出でゝ耕しつゝありし中、隣家より失火あり。みよ其よしを聞きて心も空に馳せ歸り見れど、我が家は既に火焔の中に卷かれ、内には足腰の立たぬ姑の聲あるより、みよ女驚きて、猛火をものともせず其中に飛び入りて母、及一子松太郎を救ひ出し、又飼牛の繫ぎあるを救はんとて既に入りて其綱を切り、戸外へ出すや否や家根焼け落ちて、みよは大火傷を被りしも生命にかゝることなしといふ。

●奇特の少年　薄志弱行の徒多き今日、斯るはいと感ずべきなり。山形縣酒田町字片町佐藤傳右衛門の次男寅五郎とて今年十七歲になれるは、性質温順にして幼少の頃より最も學を好みけるが、家いと貧しくして學の庭に通はすことさへ難かりけるを、寅五郎とかうに請ふて漸く父の許をうけ、學ぶこと四年間每學期優等の賞を受け、尋常全科を卒業せしは今より數年前なり。斯くて寅五郎は猶高等科に入らんと志し、言を盡して父に請へり、父も其子の教育を願はざるにあらざれども、家貧しくして暇なければ、此の上は思ひ止まりね、惡しうな思ひそと、涙をだゞへて解きさとしけるに、寅五郎うちしをれてありしが、やがて思ふやう、我自ら學資を得て大に勉めなば、如何で父も許し給はぬことやあるとて、こゝに心を決し、終に同地の酒田

新聞社の配達夫となり、風にも雨にも厭ひなく、朝夙く出で、配達を終り、夫より直ちに書冊を抱いて同地の高等小學校に至り、精勤勉學こゝに四年、其間我が得たる勞銀にて學資を辨じ、書冊を購ひ、其の餘は皆父母に捧げて苟も徒費せざりしが、去月終に試驗を受けて目出度く高等小學全科を卒業し、特に校長より其の篤行を賞されて、硯一面を與へられけるとぞ。末たのもしき少年ならずや。

●仝じく　奇特の少年あり。鹿兒島縣下麥刈高等小學校生徒荒武政二、家貧しくして學資を得ること能はず、通學の途中は必ず山に入り薪を採りて之を賣り、又休日には人に雇はれて賃錢を受け、之を學資として勉學せしが、毎學年優等を以て進級し、本年高等小學全科を卒業せりといふ。こも寅五郎に劣らざるべし。

●又　一人あり。岩代國二本松小學校生徒服部恭造は、尋常科一年級に入學以來精勤八年一日だも缺席せしことなく、學術優等を以て本年高等全科を卒業せりと。こも亦奇特といふべし。

●奇特の少女　備中國高梁小學校四年生吉田ひさ、木下まつよ、尾島けいの三女、頃日相携へて高梁川の堤に蓬を摘み、其歸路にて、いと貧しげなる女の乳兒を背負へるに遭ひ、小兒心にも憐や催しけん、三女は其摘みたる蓬を悉く之に與へけるに、其女いたく喜びて、且貧しきさまなど物語りしに、三人とも、もちたるお手玉の袋を破りて中なる米豆の類を施し、猶、家に歸りて後、父母に乞ひて各白米若干を貧女の家に持ち行きて之を與へたりといふ。

●古稀の祝　鳥取市武田要次郎、慈惠の心厚く、常に貧民を救恤するを以て樂とせり。本年は其齡七十に達せしが、子孫等相集りて祝宴を開かんと云ふを制し、其費を以て、常磐の松と、萬年を壽ぐ龜とを染拔きたる手拭を製し、之を袋となして、白米二升宛を容れ、貧民に施與すること一千五五袋に上りたりと。

●婦人農談會　といふを、島根縣安濃郡に於て開け

り、出席するもの百六十餘名に達し、養蠶、藺作、其他の栽培法等の講話をなしたりといふ。

●都踊の新作唱歌　本月七日より二十一日間京都に於て催す都踊の唱歌は、さきに第百七十七號にかかげたるが、猶其後新に作りたる唱歌は左の如しといふ。

都なごり　　豊のめぐみ

「千早ふる、神代も今も變りなき、人の心を種として、三十一文字を
敷島の、若菜は雪の下もゑて、長閑けきほどは限なりき、山田の里
の賑ひも、立てる煙りに知られける「賤が伏家のかまどさへ、戸ざ
さぬ御代のゆたけさに、御旗かゝげてうら安の、うらやすかれと祝
言の、其言の葉も曇りなき、鏡にかけて見まほしき、汀に敷し圓石、
數も澤なる大君の、惠みもこゝに淺からぬ
「花にふく、春風見ゑて池水の、そこなるかげも躍く藤がゑ
「久方の、月の出しほの紅葉山、わけゆく人のそでつ山、嵐山のこさ
さらに、詠もいさゞ蓬島や、蓬萊島の四方になき、ふかきを問くる
新亭や
「醒花亭のわびさびて、風流を此處にとゞめける、御庭づたひにはる
かなる、雲井に入るや大内の、大宮御所の殿づくり、仰ぎまつるも
畏こみて、小簾まく袖の薫るまで、軒端に榮ふ橘の、苔ながらも笑
ましげに、見ゆるもゆかし蕉の、あさもうるはし立姿「見かへしぬ
れば立田姫、紅葉のにしき綾おりて、名さへ高雄の山々に、積こ
思ひを小男鹿の、妻こふ路は絶ゆるとも、望の筆は清瀧の、川を隔
てゝ水莖に、金剛定寺の四の文字、さめてもあれど秋の日の、暮ぬ
さつぐる鐘の音に、みだれて渡天津雁、行方はいづく梓弓、春日の
影のうらゝかに「引も切らじな東山、眞葛が原を餘所にして、登る
八坂の塔もいつしか後に打過て、誰松風の誘ふらむ
「はる〳〵さうて清水の、舞臺の繪馬は諸人の、信のちかひあらはれ
て、世にもかくれぬ産土神の、地主權現の御社の、幣かさ見れば飛
ぶ蝶の、むつるゝさまもしどけなき、櫻の花の眞盛りに、逢うて互
ひの胸づくし、打かたらひて淀みなき、音羽の瀧の白糸の、三筋に
かけし水調子、調子に乗りて汲さゝの、ふし面白き歌ひめや、手ぶ
りゆかしき、舞ひめの、振の袂もさこしへに、彌榮ゑてや殘るらん

●郵便切手貯金法　といふは、既に諸外國にて實施し來れる處にして、我國にても愈々本年度より實施する筈なるが、當初は試驗の見込にて、豫算も只二ケ月分を要求せしのみなりといふ。大體の方針は、細密の貯金を獎勵する主義にして、貯金者へは、貯金通帳と別に郵便切手貼付用紙を與へ置き、其用紙は切手貼付高二十錢位を極度として、右極度迄貼付し終れば、之れを最寄郵便局に持ち行き、消印を受くると共に、通

帳に其の金高の記載を請ふ手續なりと。

●林檎の効能　なりとて、ものに見えたるは、林檎は植物纖維、蛋白質、糖分、ゴム質「クロヽフヰール」(綠色素) 林檎酸、沒食子酸、石灰、及び多量の水より成る其上林檎は、他の菓質に比すれば燐の多量を含む此燐は腦及脊髓中の大切なる成分の代謝に欠く可からざるものなり但し化學や生理學の何ものたるを知らざる時代に於ても既に林檎の人身に益ある事を知り居たるものと見え古のスカンデナビア人が林檎を以て神の食物と稱へ身體衰弱して働作の充分ならざる時は精神及び肉體の力を恢復する爲めに必らず林檎を用ゐたりとは今尚口碑に存せり

林檎の中に存ずる諸酸は坐業の人に最も必要なり此等の人に在ては肝臟の作用弛鈍なるを以て右の諸酸類體中に入り有害なる物質を排除せしむ若し有毒物をして永く體中に存在せしむるときは腦力衰へ且つ黄疸、皮疹其他之に類似したる諸般の病をも成すに至るべし

肉類過食者に免かる可からざる石灰分の過剩は成熟したる林檎の酸によつて中和せらる加之ならず、林檎、梨子、若くは梅子の成熟したるものは胃を害せざるのみならず能く酸敗を制するの力あり

右の如く植物鹽類及び液汁は炭酸亞爾加里に變して酸敗を制するのみならず能く熟したる生林檎は胃中に於て最も早く消化せらる其消化を終るまでに要する時間は一時二十分なり

●米國女尊　の風は、既に人の知る處にして、こゝにもの新らしげに記すまでもあらざれど、左にぬき出しは、頃日ある新聞に見えたる米國小話といへるものヽ一節なり。

○女尊　男女打作れて歩めば男は必ず車道に近き側を行き、途中女の靴の紐など解くることあればソレと突き出す足元に六尺の身を屈めて恭しく之を結び、時には女の裾裙を擧げて戰々兢々と從ひ行く男子を見ることもある也。車の昇降には手を取りて導き車中に空席なき時若し一人の女入り來るとあれば見ず知らずのものながら下婢たると貴婦たるとに論なく必らず帽子をとり一禮して席を讓る、學校に於て女生の後れて教場に入り來るあり誤つて鉛筆を落しつゝ顧みずして悠々とさして自席に即くや男生兩三人爭ふて之を拾ひ手柄顏に捧持し進んで女生に渡すなり、去れど米國に行きて婦人を尊敬することを知らざれば交際家にはなれぬと覺悟すべし

●疾病豫知法　人の疾病に罹る時は、先づ血液に異狀を呈す、故に血液の一兩滴を顯微鏡下に照らし見ど、普通に病的徵候を發現する前、凡て一月ぐらゐに、其疾患の潜む所を豫知するを得べし。此時に於て、早く治術を加ふれど、大抵の病氣は恐るべきものにあら

ず、肺病の如きも、咳嗽を初むる凡そ一年前に、早く血液に異狀を認むるを得、即ち肺病の初期には、血液中巨多の灰色細粒血漿中に浮動するを見るべし。此細粒は、漸次集合して後には赤色細胞體のものとなり、結核黴菌は即ち之に繁殖を初むるものなりと。又赤血球に細き裂目の發生せるを發見するは、即ち中風症初期の兆候にして、其裂目明瞭なる時は發病最も切迫せる徴なり、時には血液中に網狀のものを見ることあり、是れ痲痺症の前表なり、其多數に現はるゝは、心臟が充分血液を循環せしむる能はざる結果にして、赤血球は常に此網狀體なるものに包まる、若し心臟の血管が之に襲はるゝ時は、痲痺症となり、腦髓の血管襲はるれば、四肢の痲痺となる。而して心臟リユーマチスムには血液中に外物の包含するを發見すべし。此混合物一定の度を超ゆれば、血の出入するたび、心臟に痙攣を感じ、遂には心臟の機能を遏止するに至るべしとなり。

○新刊寄贈書

●**女子書簡文**（上下二册）　發行所　東京日本橋區本石町　金昌堂

本書は、高等女子範學校習字科囑托教授岡田喜作氏の自撰自書にして、女子としての書簡のかきふりを示されたるもの、文章は、雅に染まず、俗に陷らず、女子近世文の好模範たるを失はず。附錄として、大井川行幸和歌集序及其和歌をのせ、色紙其短册のかきぶりを示されたり。其の書風のごときは、字体正しく、印刷も亦鮮明なり。されば、習字帖としても、偏に、價値あるものといふべし。

●**日本之小學教師**　第一卷第一號　定價一册金七錢

東京神田表神保町　國民教育學會　發行

小學校教師が其任の最も重くして、併も其位の最も輕きをなげき、同志の士相謀りて國民教育學會といふを起し、小學教師の爲に謀りて之が眞友となり、小學教師をして、兒童の模範たり國民の鑄型たる其任務の重且大なることを自任せしめ、且小學教育法を研究して其弊根を改善し。小學教師の智識を增進し。品位を高め。全國の各小學教師と協心戮力し、不遇のものを救濟し、優秀者並に特に功績あるものを表彰し、以て國民教育の進歩に貢獻し、小學教師社會の幸福を增進せんことを謀るといふ。本誌は即此の會の機關雜誌なり。欄を論說、管理及訓練、教授法、學術講義、批評、教育家傳記、小學教師界、雜錄、内外彙報、法令の諸項に分ち、毎欄有益の記事に富み。卷首には、伊澤修二、小西信八、谷本富、三氏の肖像を挿みたり。

●**執中考**　全（武井義者）　賣捌所　東京日本橋通四丁目　江島伊兵衛

●**英和商賣用雜誌**（富田源太郎編）　發行所　横濱市住吉町　堺屋雜誌部　毎月一回發行　一部金十二錢

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題
住所
姓名

用紙ま半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むし。

文書式

題
住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き様、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

明治三十二年度女鑑歌文月並兼題

五月五日	歌	海邊新樹	四月廿五日〆切
	文	自ら戒むる詞	
五月廿日	歌	牡丹	五月十日〆切
	文	郭公	
六月五日	歌	瞿麥	五月廿五日〆切
	文	遠方なる叔母君の病をとふ文	
六月廿日	歌	浦夏月	六月十日〆切
	文	遠方より母の病を訪れたるに答る文	
七月五日	歌	團扇	六月廿五日〆切
	文	待雨	
七月廿日	歌	橘姫	七月十日〆切
	文	蟻	

教の庭



四月廿日兼題　汐干狩

天

名もしらぬかひの樣々こにみちて
　かへさうれしき汐干がりかな　山形縣山形市旅籠町三九六　武田粲子

地

櫻がひかごにあまりぬたのしさも
　うしほもみちぬいざ歸りなん　松江市内中原岸崎内　根岸豊子

人

貝ひろふ聲もきはへりたなびける
　かすみのおくや干潟なるらん　福岡縣久留米市庄島町　森やす子

秀逸（十首）

海士の子がうたひつれたる汐干潟
　かすみのそこの貝ひろふらん　肥後　仁保基子

袖ぬれてあまの少女にまじりつゝ
　かひ拾ふこそをかしかりけれ　三河　永井さい子

春の日ののどけきかたを眺むれば
　しほひにむるゝうらのさと人　肥後　澤田春子

沖遠くうかれてけふはわたつみの
　みやこにと思ふ汐干がり哉　周防　村上操子

なみ風の立たぬ御代こそ嬉しけれ
　汐ひくがたにあさりするにも　東京　下田春子

むれ立ちてうめの花がひさくら貝
　ひろふもうれし春のひかたに　甲斐　名取よし子

春の海や浦のみるめものどかにて
　かひあるけふの汐干なりけり　東京　諸井久良子

なにめでゝいざやひろはん櫻がひ
　ときしすぎなば汐みちぬべし　東京　牧瀬かう子

多からぬはまぐりなれど樂しさは
　かごにもあまるしほひかり哉　大坂　日吉あさ子

ひろひ得し貝の數にもいやまして
　嬉しさあまるしほひかりかな　陸奥　阿保まつ子

（以下原稿到着順）

汐干かたおのがまにまにたをやめも
　世をわすれかひひろふなりけり　溝口貞子

沖とほくしほひかりにとあまのこが
　ひろへるかひにそではぬれけり　石井豊子

こにあまる梅のはなかひさくらかひ
　いさなさな子がいへつとにせむ　羽室象子

沖にいてゝ汐干かりするたのしさを
　みやまのひさにしらせてしかな　住山幾子

しろしらぬうちつれたちて汐干かた
あさりゆくこそうれしかりけれ　宇野定子

いそ山のはなみがてらにおりたちて
おきの干がたにかひやひらはん　友永章子

夕しほぞはやもよせくるをさめこが
なみのはなかひらふそのまに　鹿瀬島嘉子

海士ならぬをさめもむれて沖さほく
みゆるかぎりはしぼひかりすも　吉富彦子

をさめ子がかよわき手にも取ぎりに
かりうろかひのかすやますらん　永目甚子

はろばろさ干かたも沖にみゆる日は
をさめもむれてかひひろふなり　那須昌子

住のゑのおきのしほ干にうちむれて
かひひろひつゝあそぶおさめこ　村崎包子

いつよりも今日は引しほさほければ
おきにかひほろひさぞおほかろ　黒田明子

をみなこは赤ものすそをかきあげて
おのがまにまにかひひろふなり　虎口資子

香椎がたうめのはなかひさりさりに
かりくらさほくしほぞひきゆく　佐々小琴子

人かげのほそくなるほごしほひがた
かひはいよいよおほくありけり　佐々有鄰子

うちむれてしほひのかたに少女らか
けふもかひさるはるのうなはら　中村壽枝子

へたてなきこゝろの友さうちいでゝ
今日のしほひにかひやひろはん　小野久眞子

おもしろく貝ひろひけりしはうらに
もすそぬらしてふれうかふまて　河田いし子

わかめかりかひゝろひつゝ思はすも　山下茂登子

おもふさちうちつれたちて春の海に
さほきみちをはいそつたへせり　板井喜世子

汐干かたあまのおさめがうちむれて
しほひかりするけふそたのしき　徳永萬壽子

わすれじさ友にちぎりてわすれがひ
かたみにあまるかひひろふみゆ　徳永廣子

引しほをおのがさきさて世をうみの
さりごりひろふすみよしのうら　小森田輝子

あまのこにさはましものを汐干がた
あまをさめらがひろふそでかひ　坂本遊多歌子

たらちれのまちますらんを汐ひがり
名をしらぬかひあまたひろへり　横山柳子

みちこんしほのおそくもある哉
しほひかた老もわかきもうちましり
さりさりひろふはるのはなかひ　横山壽賀子

あなたのしけふも汐干のひまゝちて
いさやひろはんうきわすれかひ　中山さみ子

思ふさちしほひかりするたのしさは
かすみさゝもに空にみちけり　高橋銀子

思ふさちたもさつられて江のうらに
しほひかりするけふたのしさ　瀧田直子

ま帆かたほおほろにかすむ春のうみに
みゆるものさけきしほひかりかな　立神富子

すまのうらかひあさりゆく少女子の
すかたもかすむはるのうなはす　宮野綾子

すまのうらやもすそかゝけて少女子か
わらひさゝめくこゑのたのしさ　安原國子

少女子かかひひろふなりはるの日の
なみもかすめるすまのうらへに　小笠原元子

うれしくも見いたしけりなあさり貝
　いはかけあされうなゐ子のとも
久米貞子

少女子よいさおりたちてかひさらむ
　おきへにとほくしほはひきける
林環子

わかの浦しほひがりするをとめごの
　あらそひひろふはなさくさかひ
山田婦美子

竹しばのうらのしほひにそてつれて
　けふのひと日をかりくらしけり
小倉たか子

めづらしきくさ〴〵の貝ひろひねし
　わがうれしさぞこにあまりける
眞島千鶴子

名にしおふ二見のかたのしほひがり
　いのりてひろふ子やすかひかな
薄井富子

なには江のよしあし貝をさりわけて
　しほひかりするこゝろたのしさ
薄井信子

おりたちてとく漁りなん海人の子の
　ひろひしかひのいとあまたなり
綿野りき子

少女子のもずそかゝけていくむれか
　しほひのはまにかひひろふみゆ
山根久子

あまをとめ今日の汐干にうちむれて
　あさりかひある洲さきなるらん
澤田十萬里子

けふのみは龍のみやこにあらしふけ
　はるのはなかひかりつくさなん
竹村竹里子

あらそひてひろひし貝さしりながら
　かへりはおなじかごにいれけり
吉田元子

うなゐ子がひろひし貝のこぼるゝも
　しらであらそふさまぞをかしき
吉田碩子

こゝかしこすなかきわけて貝ひろふ
　こゝろはうさをわすれけるかな
清水さみ子

わがみせにうなてふ魚は絶ねれども
宍粟富末子

　しほ干のかりのおもしろきかな

すみよしのうらの汐干にをとめらの
　しろもしらぬもかりきそひつゝ
諏訪健子

なにはかた汐干につれてかりくれは
　とほきおきにもかひはありけり
田村多豆子

貝ひろふことにこゝろのうはゝれて
　ふれよりとほくわれはきにけり
新浦美津子

みるめかることも忘れてあまの子か
　こなたかなたにかひひろふなり
白石由子

おもはずも汐干かりするうれしさに
　うきもつらきもわすれぬるかな
坂田康子

海士の子とうちつれたちて漁りねし
　かひのかす〳〵うれしかりけり
八木沼里子

うら〳〵と霞む干がたにおりたちて
　あわたゝしくもかひひろふなり
安孫子かづ子

松かげにまてるいもともまれ子よび
　しゞめがりせむしほはひきけり
下田興子

さくらかひ拾ふをとめかたのしさは
　もてるかこにもあまりけるかな
山田璋子

汐かぜにあか裳なびかしをと女らが
　とほつひかたにかひひろふなり
都水蓉子

あさりつるかひはありけり還ひかた
　みちくるしほにうではひちても
目黑佐喜子

汐干がたわらひさゞめくひとこゑは
　たつのみやこにひゞくなるらん
河原芳子

おりたちてあそべるたつの影さへも
　かすむひかたにかひひろふ見ゆ
坂田君子

汐干かりかひあるをりやうきめかる
　あまか手はさもうれしかるらん
名取正代子

あまが子さわれも見ゆめりひく汐の
あさをおひつゝかひひろふ日は　田代點子

さくら貝あさりくらしてはるの日の
ながきもしらであそふたのしさ　田代綾子

海士ならぬみやこ少女のなれぬ身も
かひをばひらふしほひがりかな　河村君子

あそふ子の聲のみもれてうら〳〵さ
ひかたもさほくかすむころかな　立石哲代子

島のあさたさりたされろうなゐらか
けふはしほひにかひゝろふなり　岡山さり子

思ふさちうちつさひつゝはまくりを
ひろふはろ日ぞたのしかりける　佐々敏子

わすれじな海人の少女にうちまじり
かひひろひゐし今日のすさひを　吉田露子

汐ひかたあさろかひさへさはなれさ
ねがふは今日のこゝろなりけり　所佐以子

しほ引けば老をわすれてひろふかな
かひもおや子のあろべきものを　小杉ひさ子

山ささにすむみにしあればしほひかり
あさるかひなきわかのうらかな　和賀しげの子

さゝなみのまもなく人のつさふかな
しほひにあさろかひやあろかさ　泉川うた子

みわたせば汐ははるかにひきさりぬ
いさやひろはむおきのたまかひ　田邊てる子

しほひ狩うらのみろめもあまたにて
うちさけかたきあそひなりけり　戸塚てつ子

ひろへさも〳〵なほつきせぬは
しほひのうみの小かびなりけり　吾妻ちか子

こゝさいひかしこさあさるしほひ狩
わかめ小がひも籠にあるまで　館脇ますこ

友千さりなれもしほひにおりたちて
あかこさかひやあさるなるらむ　佐々木富子

あまの子も春のかざしさくらがひ
しほひのうみにあさるなるらむ　新海わか子

けふをよきしほひがりさて海はらを
こゝろのさかにあさるさもごち　伊賀直子

をぼつかな海さへけふはしほひかり
かへるふなじもわかぬばかりに　杉浦糸子

若めかり小かひさり〳〵あまの子も
けふのしほひやのさけかるらむ　小曾根しう子

しほ干にさひさこかゝげてけふもまた
かすみかうらにかひやひろはむ　萩原章子

わすれ貝ひろひてうさもわすれなん
かすみこめたるおきのひかたに　山中糸子

だもさにもこにもあまりて汐干かた
かひのかず〳〵ひろふたのしさ　大溪しけ子

我が宿にかへらんこさもわすれがひ
ひろひてくらすしほひがりかな　大溪貞子

しばうらの汐のひかたにうちむれて
あまたのかひをひろふたのしさ　楠しづ子

ひたすらにあさりする間に潮滿ちて
小ぶれのかたにいそぐをさめ子　木原鳳世子

うなゐ子がもすそを高くかゝげつゝ
またもさりぬのこゑぞのごけき　早川重子

さくらがひうめのはな貝さり〳〵に
しほひがりするけふのたのしさ　大海原久子

浦かせにそてうちかへしひろふなり
あまのをさめかかひをあさりて　本庄志雅子

打つれて出てしともにもおくれしと
　あさるもうれししほのひがたに　後藤信子

なとめ子がひなの祭りのまうけにと
　しほひにいでゝかひひろふなり　賀茂笹子

しまひめの神にまうでしかへるさも
　かひあるけふのしほひなるかな　村田多豆子

引く汐にひきのこされしうなゐて
　かひひろふ子そほこりがほなる　河合ぬひ子

さくらさくしまわの花も折にあひて
　かひあるけふのしほひかりかな　服部萬子

あてひともあまにまじりて春の海の
　しほひのかたにかひひろふなり　加藤加壽子

思ふどちしほひにいでゝとろかひの
　かずなきそひていざほこらまし　服部桑子

手にもてるこにみたさんと少女子か
　ひがたにたちてかひひろふなり　服部錦子

汐干かりおもはずとほくたどりきて
　かへるはまぢはかすみはてけり　寺尾さかへ子

うれしくもまなびの窓のひまな得て
　けふはしほひにかりくらしけり　寺尾まさ子

はるなればいそべに貝をひろひつゝ
　あそふわかみもうちかすむらん　小野寺てふ子

うちつどひ干潟にあさるなと女子の
　たもとゆたかにはるかぜぞふく　尾崎嘉子

さくら貝ひかたにひろふなとめらの
　たもとにかろくはるかぜぞふく　新井さ代子

貝ひろひいそなつまんとこのはるの
　しほひにいてぬひとなかりけり　菅原松子

少女子かたかきひくきのわかちなく　中島よし子

　ひさつにあさるおきのひがたに

月も日も三つのはま邊にうちむれて
　みやこのつとにかひゝろはなん　上杉光子

籠の中に餘れるはかりひろひけり
　しほひのおきのなみのはなかひ　高橋類子

浦干どりなくれそとほきいざともに
　いそ邊つたへにかひやひらはむ　小松靜子

かひもなかし爲もうれしとあくかれて
　あさりつきせぬしほひかりかな　錦織涼月子

しほは干ぬいと礒のへにおりたち
　あまのなさめとともにあそはん　錦織郁子

そよ〳〵と袖ふくかせものとかなり
　しほひかりするはるのはまへは　錦織幸子

かきわけし眞砂のうちにうれしくも
　あまたのかひなひろひぬるかな　稲原菫子

少女子かはなのたもとにひろはれて
　さくらかひたにいろなかりけり　氣賀澄子

濱つとにせまくほしきにかひならて
　ひろふなとめのすかたなりけり　氣賀定子

思ふどちそでなつられてしほひまち
　かひひろふこそたのしかりけれ　小林かつ子

業なれし海士におとらずまけまじと
　かひひろへどもかなはさりけり　田中廣子

籠にひろふ濱のはなかひさくらかひ
　しほよりさきにみちにけるかな　日高かず子

たつ波もなさまる御代にうちつれて
　しほひのかひなひろふたのしさ　櫻井淸子

うちつれて汐干かりにとなさめ子が
　あかものすそなうちぬらしけり　櫻井春子

をさめ子がまちにし貝をあさりつゝ
　けふを笑がほのしほひがりかな　　青木秀子

汐かぜものさかにふきてさくらがひ
　ひろふはろこそたのしかりけれ　　篠澤こさ子

思ふさちひろふかひたにかそふれは
　ひさにまさるはうれしかりけり　　新隈よれ子

住の江のしほひにあそふをさめ子も
　けふはいへちもわすれはつらん　　絹川ますゑ子

少女子があかきもすそをかゝげつゝ
　かひゝろふさま見るもたのしや　　高屋はきの子

そてひちてしほにぬれつゝ少女子か
　さほき手かたにかひひろふなり　　敷島花子

さくら貝しほ干るいそにかそへけり
　のさけきはるをひろひあつめ　　笹子茂子

海かすみこむろうらわの夕ふなに
　ひろふ小がひのおほくもあろかな　　横手こう子

こそよりも今年はさらにまさりなん
　きのふもけふもうみのさちあり　　横手たつ子

はるかせをたもさにうけて少女子か
　しほの干かたにかひひろふ見ゆ　　小川清子

おりたちて貝ひろふ人のあまたあれは
　はるはいそへのにきはしきかな　　持地桃枝子

さくらかひはなかひひろふ處女子か
　あか裳のすそをつるはきにして　　田江糸野子

四月廿日兼題　遲咲の櫻を見て

天　伊勢國度會郡宇治山田町大字中之切町　河原芳子

春駒の足並疾う咲き初めて、疾う散りけるは、まことにいさぎよけれど、岩外のちりて後に咲き出でたる櫻の花こそ、いとあはれ深かりけれ、雨に風に心を痛め、思をなやましたる花のやう〳〵うつろひぬと聞きし時は、『たれこめて春の行くへをしらぬまに』とかこちたりしが、さて春の名殘を今一しほと、しづけくも咲ける櫻を見ては、日頃のうさも晴れ、心のどけく爽やかになりて、うれしとも嬉し、

おくれ咲く櫻の花のなかりせば
　今年は春にあはざらましを

地　羽後國平鹿郡淺舞町伊勢多方　河本柳子

花わけころもぬきかふれど、なほなれしこかけの床しくして、二人三たりうちつれて、例のなにかし山にわけのぼりぬ、ところせく咲きにほへりしも、一夜の程にちりうせて、こずゑをくらく若葉さしたるか、いつこにか春のなごりのとまるらん、吹き來る風のかをりぬれば、いとゆかしとわけいるに、きよき谷川のほとりに、一本の櫻、今を盛りと咲きみちたり、かく美しう咲きにほへるも、時おくれたればにや、今はとふ人もあらざりけり、大かたは人の愛でにもえあはでちり過ぎなん、いとほしの花や、あはれ學の道におくれたる身も、此の花に同じかりなんと、いと口惜しう覺ゆるまゝに、

世の春におくれて咲ける山櫻

さかりも人に知られざらまし
人

大阪市西區南堀江下通
二丁目八十九番屋敷　日吉あさ子

何事も新らしきをめで早きをきそふ世に、遲咲の櫻ぞかりゆかしきはあらじ、このほど伯母君より、庭の若葉に交れるが珍らしければとて、ふさやかにさけるをれくらせ給へるに、いとうれしく、花瓶にさせたれど、色香もことにいみじく、移ろはめ間も久しくて、げに勝れたるものはおそくなるてふ諺も思ひ出でゝ、一しほなつかしうなん。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

鶯のこゑもいつしかきゝなれて、野べのいとゆふの　どかなるは山のさくらは、春風の心にまかせて、青葉のかげふむばかりになりぬるに、水末に雨よぶ山鳩のなくねをしたひ、鳥うち帽子を冠りて、をゝしきすかたの狩人のこゑするかたに、わらびをらんと、わけいるとはなしにうかれうかれて、終に山ふかくまよひいりぬ、おもひきや、白雲のむかふすかとみるばかり咲きにほへる花は、おく山つみの神のたくはたか、あなめでたきながめにて、今日はことさら山つみのたまもの　になんありける、わすれもやらすて筆とりかくなん。

綿野りき子

木々の稍青葉になりゆきて、うすものゝはたへ涼しく、ほとゝきすの初音またるゝ頃、ひとり春におくれて咲き匂ひたるは、初花よりも珍らしと曰ひけん、げにほこりかならすいとなつかしき心地ぞする、まいててる日のかげさへうとき山ふところに、何ひそみてか、哀れにもゆかしき一本にこそ。

目黑佐喜子

春風にそゝのかされて、とく咲き出でし若櫻、はやも移ろひて淺ましき影を芝生の上に殘し、梢日に添ひて青みゆく頃、やうやうふくだみそめて、艶なる姿見するは、遲咲の櫻なりけり、今年も後園の垣の邊なる二もと三もと、時知り貌に咲き匂へるが、いみじう床しくて、朝な夕な眺めつゝ日を重ぬれど、八重にしあれば、盛り長きが上に、色さへ香さへ一重には勝りて、めでたしともめでたし、あはれ、花のみかは、何事も只急ぎぬるは、かりそめに人のたゝふめるも、如何でか徐に爲なる事の眞あるに及ぶべき、此春へ遲咲の花見るにつけても、深う思ひあたりぬるよ。

名取正代子

いつとても花はめでたきものから、とく咲出でたらんもいみじけれど、なほよそのちりぬる後に匂ひいでたるこそ、こよなうゆかしくあはれふかけれ、さても、我庭の八重山櫻よ、ことしの春は、あまたゝびさねかへりたるまゝに、いたくもまちわたられつるを、やうやう昨日けふほころびそめつるうれしさよ、一重なるはとくうつろひはてたれば、こたびおくれて匂ひいでたるが、なかなかに再び春來し心地せられて、いといとめづらかなり、さても咲きぬべき花は、とかれおそかれ匂ひ出でゝ、さて一さかりをすぎぬれば、いさぎよくもちるがならひのめでたきを、武士の大和心にたとへられつるも實に理なりかし、さるにつけても、何ばかりの色香もあらぬ身の、いたづらにながらへつゝ、おくれてだに花さくべくもあらで、世にふることゝ、此花の前にも面なき心地して、いとゞはづかしうなん。

河村君子

なにがしの法師の、遲櫻はすさまじと云はれしも、げにや、何事もすゝみゆく明治のこの御代は、ことにさるめり、花ははやく匂ひて、のこりなくちるぞめでたき、さるを、今は鶯の聲さへものうげにきこゆるに、遲くも咲き出でたるは、春のながめを久しうせんとにや、外のちりなんのちをまてりしにや、とまれ、とくさきてこそ春知りそむるとめではやさるれ、かく外のちりたるのちに咲きたるは、いと品おとりてなん。

山田きよ子

四季折〳〵に咲き出づる花樣々にて、其色さへも、又樣々にて互にまけじ劣らじとほこりあふ如くゑみ初むるぞが中に、いと美しき花は、かこそなけれ、其德として、かなるが如く其色のうすくれなゐの程のよさ、其有樣の形よさ、げに大和心にたとへらるゝも理りぞかし、あなをしや、かくながめつる程もなく、うつせみの世にもにたるさか、はやちりゆくこそをしけれ、さりながらまだ梢になごり殘して咲きつるはいとめづらしう美しう愛らしきよ。

松林歆子

梅はよろづの花に先立ちておのれ一人春知りがほに咲きそむめれど、おそ咲きの櫻のみは、つれ〴〵草に、みづからあとにして人をさきだつる事のあらまほしとしるされし言の葉にそむかで、ひとりおくれて咲き出でし心れいとおくゆかしくもまたやさしと思はるゝまゝに、かへはかいしるしつ。

佐々敏子

曉の鶯によびさまされて、ながめし梅の花もいつしか根にかへり、匂ひゆかしき櫻の花も大方散り失せて、諸木も青葉にのみなりゆけば、春のくれのさま見んとて出でけり、日は空も名殘なう晴れわたたり、四方の景色の、いと面白かりければ、そゞろに足のすゝむを然ねず、そこはかとなくたどりあるくに、かなたに、ひら〳〵と飛ぶ蝶あり、心を止めて打見れば、遲咲の櫻の一本、暮れ行く春をも知らで、散りも始めず咲きも殘らぬ樣、何にたとへんやうもなく、いとなかし、あはれ、世の春に後れじと、一時に艷を競ひし花の盛りも、夢の間に過ぎ、一陣の風にもろくもちりて、今はあとさへ留めざるに、若葉しげりゆく木の間に、ひとり咲き殘りたるこの遲櫻、ゆくりなく見るにつけても、いと床かしさにたへざりければ、かくなん、

山里の青葉がくれの遲櫻
　世にあらそはぬ色ぞ見えける、

折しも、花辨の二ッ三ッ、ひら〳〵と飛びちりて、さながらうちうなづくに似たり。

小杉ひさ子

花といふ花の君ともいふべきは、我日の本の櫻なりけりと、昔しの人の云ひけん如く、げに櫻は萬の花のかしらにて、外つ國々の花なとは、わが櫻の花に比ひつべくもあらず、されど、其散ることのはやき僅か日數をへだてぬに、皆散りはつるは、散るべき時に散る者にやあらん、されどなが〳〵なさけなきことにこそ、緣の若草は、まだ歌かき春の半ば、大方の櫻は皆散りはてゝ、其みやびあるはにぎやかげなる花の姿は、はや見るべくもあらず、さりとて、他にも美しき花の多かるに、朝夕櫻にのみこがるゝ無從なれば、又來ん春をまたばやと思ひつ、ある日徒然の余り、友とちを訪づれんと、柴の門を立出でゝ、とある野道にさしかゝれば今を盛りと、たゞ一と本の櫻の、ふたひろばかりなるが、路の傍に咲き滿ちてありければ、又來ん春迄見ることかなはずと思ひしに、はからずも此處にて見し其時のうれしさ、言ばにたやすくもいはれず、さはれあはれなる一本の櫻よ、などて只ひとり茲に遲れしか、われのこゝろをくみて慰めんとてか、いな〳〵左にあらず、殘りの春の捨てがたくてなるべしと、いひもあへぬにさつと吹き來る春風に、花の二ひら三ひらわが袖にちりかゝりぬ、よりてさくらに向ひて曰いけるやう聞け櫻花よ、咲きては散り、散りては水の流れに委ぬること、百千年なれど、一年として春を樂まぬ事あらじ、かくも千年の昔より、又來ん千年百年と、春の榮華を得るなるに、茲に僅かばかりの殘りの春を惜みたりとて、何の甲斐やある、猶また咲かせ散らすは、春風の掌の中なれば、汝の自由にとならず、いつかな散らであるべきに、益なき力をつくして、世の人の笑をうくるよりも、散るべき時に散りばてゝ、花の君たる名を後の世に迄殘されよと、いひて過ぎ行き、見かへれば、櫻も又わが言に感じやしけん、數へもならぬ花びらは風に吹かれて散り行く樣ぞあはれなる。

木原鳳世子

今日しも、二たり三人契らぬ友の尋ね來て、せき立つるに任せ、共に

家出しけるが、獨り籬に咲き殘りたる花、得も言はれぬ風情にて、適れ日本男子の赤心さ、咲き來る風にあへなく散り初めけるが、見るがうちに、道もまたらになりにけり、あな心づくしの山櫻よ、今日こそは、菅の根の長き春日も、ひるま過ぐるをだに知らざりけれ。

錦織幸子

彌生もいつか未つ方となりぬれば、隅田わたりも早や訪ふ人絶ゐ果てぬるよしきゝつるを、獨り我が庭の山櫻の一本は、今一入の名殘とにや青葉がくれの梢より、ゐまはしげに清き色もさにほひ出でぬ、あはれ人を先にし已を後にすさいひけむ言葉すら思ひ浮ひて中々に早咲よりは可惜しうあはれにおぼゐて、ながめやるもいさ床しきや。

横山柳子

あはれてふことをあまたにやらしさや、かすみのたもさもたゐたゐにうくひすたに古巣にかへりにしころを、めつらしく匂ひいてたる、けにいひしらすをかし、おのれ此山に分け入らすは、あたら深山木の青葉がくれにちりはてむを、いたくなわひそ、春におくれしかひに、われ見はやさんさ、ひごりこちつゝ、あたりさりがたうなん。

春月朧々　美奈井芳子

夕まぐれかすみのなかにこもれども
くもりははてぬはるのよのつき

春野遊　浦井豊子

こゝもなし彼處もよしさつくヽし
つめごもつきぬはるの野あそび

名所梅　山田璋子

月か瀬の名におふうめのさきしより
したゆくみづもかににほひけり

鶯　櫻井まさ子

かきならす琴のしらべをしたひ來て
聲ものさかにうさふうぐひす

旅宿雨　櫻井治子

たひまくらまさ打つ雨にふるさとの
ゆめのうきはしわたりかれつゝ

野外霞　櫻井はる子

ふく風もいつしかたゐてうらヽヽさ
のさけき野邊のはるかすみかな

若草　櫻井まさ子

春さめのふるたひごとにいろつきて
かき根にもゆるにはのわかくさ

寒夜千鳥　八木沼里子

さよ千鳥なくねさむけにさわくなり
うきねのとこやこほるなるらん

春雨

うくひすのぬれつゝ來鳴く我が宿を
訪ふ人もなしはるさめのころ

外國にある夫を思ひて

みづ莖のあさにはあらであはれてふ
きみがこごの葉きくよしもかな

春曙

なつかしきかたわれ月もしらヽヽさ
かすみてにほふひんがしのそら

歌　北原季子

ひろひさる手にもあまれるはまくりの
かそふるまでになりにけるかな

霞中梅花　田中ひろ子

野も山もひさつにかすむこのあさけ
うめこそかをれはな見ゐれご

或友の身のうきふしを告げられしにつきて

竹里貞子

行き廻る浮世の雲の村時雨、遂には濡れぬ人もなけれど、一歳の中に藤衣かされ給ひて、寄るべ渚の蜑小舟の、波風荒き世の中に、身は浮船のゆられて漂ひ給ふ御身の上のいたはしさを、夜のねざめに思ひやりまつりては、妾もうきには漏れぬ涙の雨に、いつも夜着の袖うちぬらし候ぞや。げに、世渡りばかりうきものはあらじかし。胸には涙をたゝへつゝも、面にはさらぬ笑顔をつくることもあり、妾とても、四歳まへ母を失ひてよりは、筆にも口にも泥しがたき、心うき草のみ茂りて、葉末に結ぶ露ほども、樂みと云ふことをおぼえねば、月の光りも花の香も、いつれ思ひ出の種ならぬはなく、兩親ゐます人々の、兎角羨ましくて、いつも涙に袖うち濡らすのみ、只頼みとするは父のみなれど、それすら今は年老いぬ。老いぬればさらぬ別のありとしいへば、風の前なる燈火の心地して、いとも心細さ限りなし。年毎の夏冬の暇に、父あればこそ歸りて聊か心慰む便りもあらめ。若し頼む木蔭に雨漏る事しもあらば、廣き天の下に誰をたより誰を頼まん。世のとき風はひろやかなるわだつみも、所せき庭の泉水もえらばで波たちさわがする習ひなれば、かく梶をたえて沖中に漂へる妾の身は如何になり行くならん、あらぬ方に漂ひもせん、底の藻屑となりはてぬべきか、思ひやる行先いと悲し。

さても過ぎし日、御父君の忌日を迎へたまひてやさしき胸に包みかねたる御悲を、うつしゑに語らひ給へど、父君は答へまさずとの御歎き、あまりの哀れさに、妾も思はず御文を顔にさしあて、なきくつをれ候ひき、げにのたまふ如く、家の礎倒れては、かよわき女と侮りて、以前は親しかりし者もうとくする習ひ、まして柴の一本もゆかりなき世の人は如何ならん、笑もて我をあしらへど、心の底のときつるぎ、穗にあらはるゝうたてさよ。哀れ御身は父君の遺言の如く、世の常の少女と思ひ給ひては誤りあらん、心をたしかに持ちてよ。御家を興すもすたらするも、御心一つぞかし。さるを、萬一病ひなど惹き起したまふ事しもあらば、亡き父君兄君も、そを嬉しとはおぼすまじ、世俗にも云ふ如く、病ひは氣の持ちやうなりよくよく心してよかし。お目もじ致す毎に沈みがちなるおん顔ばせを見れば、妾も何となう物悲しくおぼゆるなり。いかで、時々はゑみ栗のゑましき姿をも見せてよ。世に幸なきも天なり命なりと思ひて、嵐の山に散る花の實のなるはてを、只運にまかせ給へかし、さて數にもあらぬ妾を、誠のはらからとも思ひ給はり、うれしとも嬉し。

樹の蔭も他生のえんとかや、一河の流れならぬ御身の哀れさは、汲みてしる其心淺からんや、かくお互に身のうきふしの似たるも宿世のえにしにこそ候はめ、さらば、よしや御涙を人には包みたまふとも、妾にはいかで心ゆく限り漏してよ、濡き衣手を厭ひたまはずば、せめてふせぎまゐらせんものを、哀れ、虎と見て放つ矢は、千曳の石とさへ穿つとかや、身は手弱女にありとても、心はなどか丈夫にも劣るべき。お互に力になりもしつなられもしつゝ、天晴家の風をば吹かせまし。月の桂をも手折らまし。君には、かまへて隔ての栢根措き給ふな。飛鳥川のかはる淵瀬はなきものとして、昔ながらの山にちぎらん。千代萬代までも、哀れこの文はしも、業平のなさゞの歌の姿ならねど、心あまりありて言葉足らず、さるかたに見許し給ひてよかし、あなかしこ。

折にふれて

八木沼里子

八つ九つばかりなる女の童あまたあつめて、詞又は文字書く事など敎へける或る日の事なりき、をみなのよろこぶ小布あまたとりいでて、この色は黑、この色は紫、かれは何、これは何と、語りつ問ひつなしける折、燃えたつばかりの紅の布を示し、こはくれなゐといふ色なり、字はかく書くものなりと敎へければ、皆よろこびて、口の中に靜かに誦しつゝありしが、中なる一人他に心奪はれて、覺えたしかならぬ樣見えければ、特に名指して此字讀めといへば、覺束なくてや、首うなだれて讀まんとせず、今敎へしのみ忘るゝいとまもあらじと促せば、思ひ定めてや、打あふぎてもらはないと讀みぬ、こは紅を呉れないと思ひ、更に轉して貰はずいと云ひしなりき。いとをかしきことにこそ、そをこらへしおのれの腹は、またふくれけり。

近衛公爵題辭
黑田子爵題詠

照國公感舊錄

國光社編纂

故勝伯爵題辭
高崎男爵題詠
東久世伯爵題辭
島津久實氏題詠
副島伯爵題字
寺師宗德氏序文

松本楓湖氏挿畫

全一册
定價金五十錢
郵税金八錢
郵劵代用一割增

輓近**維新史**の攻究闡明に力を盡すの人多く隨て此間に於ける偉人傑士の傳記評論續々として梓刻に上るゐるも獨り**島津齊彬公**の詳傳に至ては世未だ好適の著あるなく信憑すべき記なきは識者の常に遺憾となる所なり夫れ**王政維新の原動力**は薩に在り而して**薩の原動力**は實に**齊彬公**其人に在るを知らむ公が詳傳の維新史に欠くべからざるや又言を俟たざる也本書は**公が生涯を詳述**したるものにして、傳記尊王外交經濟文事民政撫恤の七大綱に分ち卷中の事蹟は一々**周密**なる**調査**を遂げ編者が經營慘澹の餘に成りたるものにして事を記する極めて**精細**筆を遣る極めて**謹嚴**明窓の下之を繙かむ公が一生の閲歷、歷々として掌を指すが如く又以て**維新鴻業の由來を知るに足らん**製本亦清麗にして卷中挿む處の**楓湖畫伯**の圖畫と卷末に付する處の**明治諸名家**が追懷の和歌は錦上更に花を添ふるもの也

發行所
東京京橋區築地二丁目廿一番地
靜思館

社告

○代價は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候
○郵券九厘以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事
○別に領收證を出さず今月領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書の送料添附の事
○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		
一册	十錢	
六册前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二册前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

廣告料
五號活字廿三字詰一行金二十錢

明治三十二年四月二十四日印刷
明治三十二年四月二十五日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木艮雄

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號新橋八八）國光社

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所 國光社印刷部）